

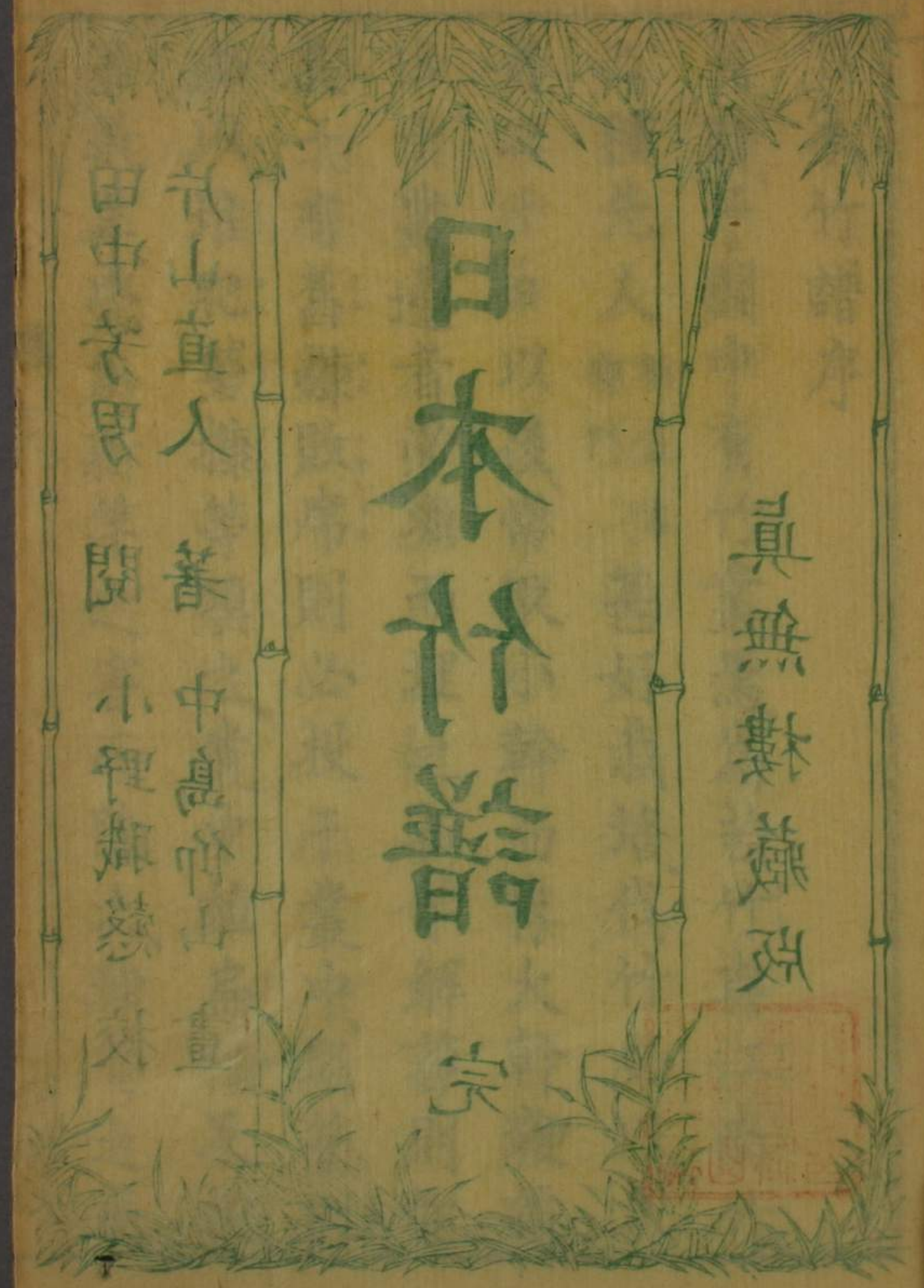


真無對難強

日本竹譜

宗

六山直人 著
中島竹山 畫
田中老思 閱
小理輝慈 外



田中芳男 閱 小野職愨 校
片山直人 著 中島仰山 畫

日本竹譜

完

真無樓藏版



河津若林
藏書



日本竹譜序

舊時、予園中有竹叢焉、爲苦竹マダケ與江南竹ナンソク二種、先人稱直右衛門甚好栽培、伐竹必以八月二十日以後、常取小幹而存大幹、鞭筍出于叢邊者必掘而埋之、新竿解籜則記支干有舊糠フル敗席クサレゴモ則必投于叢中、堀筍則必以堆肥ツミコハ礮糠スリ等填之、叢中植扁柏ヒノキ及枚居數年、覺爲新竿之害而除之、鞭筍之蔓

門
詳 604
卷 1

日本竹譜
序

延而出菜圃者必掘而食之焉。時予尚幼，先人不許其入竹叢而遊戲焉。其培養伐採之法至嚴矣。今當草此編而追念舊時，相發明多，是皆先人之賜也。今又有伊藤錦窠田中芳男小野職愨三君之翼成訂正，所以是忻然不辭而上梓也。

明治十八年十月

真無樓主片山直人序

緒言

植物古今盛衰アリ、近時盛ニシテ往年無キモノアリ、竹名某書ニ存スト雖モ、現品ヲ見ル能ハザルモノアリ、是レ最モ遺憾トスル所ナリ、此編素ヨリ用材竹ノ培養ヲ主トシテ編述スト雖モ、旁ラ盆玩及ビ庭園ノ粧飾竹ニ及ブモノハ、今ノ僅々盆玩トスル所ノモノ、將來蕃蔚シテ林ヲ成スニ至ルモ知ル可ラズ、又竹名ヲ聞テ現品ヲ見ザルモノ一二アリト雖モ、異日蕃殖セバ用材竹タルニ至ルベキモノハ之ヲ筆ス、他邦異域ノ竹

ニシテ本邦ニ栽植セザルモノハ措テ記セズ、唯
 今ト後トヲ問ハズ、苟モ世ノ需用ニ供スベキモ
 ノハ、目力ノ觸ル、ニ從テ之ヲ撮録ス、然リト雖
 モ、淺見ニシテ名實相差ハザルモノナシトセズ、
 寡聞ニシテ地方ノ所産ヲ登録セザルモノナキ
 ヲ期シ難シ、世ノ君子、幸ニ誤謬ヲ訂正シ、遺漏ヲ
 報道セラル、アラバ、獨リ編者ノ幸ノミナラシ
 ヤ

明治十八年九月

編者又識

例言

一番戴凱之竹譜曰、植物之中、有名曰竹、不剛、不柔、
 非草、非木、小異空實大同、節目或茂、或澁、水或挺、或巖
 陸、條暢紛敷、青翠森肅、質雖冬積、性忌殊寒、九河
 鮮育、五嶺實繁、其中皆並其於竹譜、其於竹譜、
 一大和本草云、竹、是一族之總名、一形之偏稱也、植
 物之中有草木竹、猶動品中有魚鳥獸、
 一和漢三才圖會云、竹、諸草中長高故名、多計、本朝
 亦有數種、而今唯淡竹、苦竹、及紫竹、筱竹、多有之、
 一和漢三才圖會云、本綱、竹不剛、不柔、非草、非木、大

抵皆土中苞笋各以時而出旬日落籜而作竹也
 莖有節節有枝枝有節節有葉葉必三之枝必兩
 之根下之枝一為雄二為雌雌生笋其根鞭喜行
 東南以五月十三日為醉日此日栽竹能茂盛也
 六十年一花花結實其竹則枯竹枯曰紵竹實曰
 獲シシコ小曰篠大曰蕩其中皆虛其外皆圓其性或柔
 或剛或滑或瀦其幹或長或短或細其色有青有
 黃有白有赤有烏有紫有斑

一五雜俎云栽竹特不限竹醉日正月一日二月二
 日直至十二月十二日皆可栽大要不傷其根多

斫枝梢使風不搖雨後移之土濕易活竹太盛密
 則宜芟之不然則開花而逾年盡死亦猶人之瘧
 疫也

一和漢三才圖繪云竹中隔不通者曰節和訓竹
 青皮曰筠ノボ筍皮曰籜ノボ凡竹物之有筋節者也故筋
 節字皆從竹平六日

一秘傳花鏡云竹乃植物也隨處在之但質與草木
 異其形色大小不同竹根曰菊旁引曰鞭鞭上挺
 出者名筍筍外包者名籜過母則籜解名笋笋之
 節名筠初發梢葉名篔梢葉開盡名籜笋上之膚

名筠，古人取義獨詳。

一大和本草云：松柏至百尺，以百年之久，竹只生長旬日之間，于霄入雲，是植物尤靈者也。

明治十八年九月

編者識

引用書目

和漢三才圖會

大和本草

和漢通名

本草圖譜

汝南圃史

秘傳花鏡

草本性譜

有毒草木圖說

日本釋名

竹譜

竹譜詳錄

竹譜圖

志村竹圖

皺竹真寫

竹譜寫真

印葉竹譜

桂園竹譜

竹實記

農業全書

本草會釋

地錦鈔

名物類編

物品識名

掌中名物笥

古名録

草木錦葉集

草木育種

日本産物誌

廣益國産考

勸農固本録

重訂本草綱目啓蒙

興農叢誌

重修本草綱目啓蒙

菌譜

大和本經

博覽會出品解説

草本六部耕種法

草木奇品家雅見

右引用書中、獨桂園竹譜ハ文政年間、岡村尚謙氏ノ著書ニシテ、諸書ヲ採採シ、和漢ノ稱呼ヲ辨ジ、或ハ舊說ノ誤謬ヲ訂政シテ、寫本五卷トナシ、竹類五十餘種ヲ別シ、附スルニ圖ヲ以テス、和漢竹類ヲ蒐集スルノ書ニシテ、備考トナスニ足ル者此書ヲ以テ最トス、然レドモ寫本ナルヲ以テ世ニ知ルモノ稀レニシテ、且裁伐ノ方法等ヲ記スル事ヲキハ遺憾ト謂フベシ、然レドモ今此編ヲ筆スルニ當リ、大ニ裨補スル所アリ、因テ特ニ此事ヲ記シ、看者ノ一考ニ供ス

小野職慈氏曰、桂園竹譜ハ、岡村尚謙氏ノ著書ニシテ、桂園ハ即同氏ノ別號ナリ、文化文政ノ間醫業ヲ以テ世ニ用ヒラレ、兼テ本草學ヲ嗜シ、博覽強記舊聞ヲ襲ハス、此竹譜ノ外、桂園橘譜及ビ神農本草經、古義同拾遺等ノ撰アリ、其論說頗ル高尚ニシテ先哲ノ未發ニ出ル者多シ、同氏ノ著書茲ニ載スル者ノ如キハ未ダ曾テ李棗ニ上スモアルヲ見ス遺憾ト云フベシ

日本竹譜目次

卷之上

総論

筍 竹枝 籜 節 竹根 竹葉

まふけ

適地 肥料 移植 保護 培養

伐採 竹竿

もうそうちく

適地 肥料 移植 保護 培養

伐採 筍 筍製造諸法 生漬法

酢漬法 乾筍 塩藏 煙藏 雪花菜

漬 糖藏

はちく

りぢけ

附 螺節竹

神代竹

やぢけ

えぶねだけ

かんざんちく

通絲竹

ねざい

ごまぢけ

即 くるちく

かんちく

附 茂草竹

ほていちく

きつふうちく

卷之中

斑竹

くまざい

すゝぢけ

竹實

附 分析表

ふんござい

實竹

不うらいちく

臺山竹

大明竹

なりひくふけ

籐竹

去ほちく

きんめい竹

黄金竹

去をうちく

去かくふけ

孝行竹

金山竹 附母子根竹

かじろふけ

まがりふけ

ふふまたふけ

をきなふけ 附水晶竹

龍鬚竹

卷之下

疎節竹

雙枝竹

附ヲロシマカムロガ

兒篠

羅漢杖竹

玳瑁竹

尺八竹

瑤瑁竹

篋篋竹

沈竹

漢竹

ふぶふけ

管竹

以む少竹

さかやふけ

竹ノ諸法

節間ヲ短クスル法

竹ヲ輕クスル法

竹ヲ平扁ニスル法 附 タケニグサ

竹ヲ曲ル法

鼈甲竹

竹ヲ燻ス法

竹、變_ズ斑點_ニ法

竹ヲ晒ス法

節ヲ貫ク法

竹ヲ割ル法

竹ニ字畫ノ腐蝕ヲ現ス法

竹彫刻法

竹絮製法

竹火繩製法

竹繩製法

竹紙製造法

竹杖_ノ製法

竹弓材

節間ヲ長クスル法

大和天井

竹ノ通蔓ヲ防ク法

水火豫防

竹蠟

萬年蕃籬ノ造法

さしうを

多けほご

多けみそ

竹瀝タケノシヅメ

竹蓐タケノクサ

竹草

偽筍バクモ

仙人杖タケノコノササギ

やびるけ

護基竹ノ説

竹ノ枯死ヲ防グ説

竹ノ扦插ノ説

竹ヲ肥大ナラシムル法

竹ノ肥料

竹ノ禁忌類

目次終

日本竹譜卷之上

片山直人著

小野職愨校

中嶋仰山畫

總論

多介天文寫本
和名鈔

漢名竹

通名たけ

竹ハ和漢異名多シ、和ノ異名、千尋草、河玉草、夕玉、
草、小枝草、竹草、漢ノ異名、此君、瀟洒君、戶魯孫、抱節
君、支那語「チ」、朝鮮語「ソ」、洋語「パング」竹ハ林

氏綱目第六綱第一目ニ屬シ、自然分類、禾本科、第十族ニ屬スル苞木常緑植物ニシテ、普通學名「バンバサグラミ子ア」 *Bambusa Gramineae* ト稱ス、竹ノ字ハ、形ニ象リテ作ルモノニシテ、貝原翁、日本釋名ニ、竹ハ高カキナリ、ケトカト通ズト、以テ自然ノ名稱トナリシモノナラン、竹ノ種類甚多シ、和漢三才圖繪六十一種トシ、秘傳花鏡三十九種ヲ列ス、而シテ、今本邦ニ在ルモノ五十餘種ヲ列ス、和漢古今、竹ノ事ヲ記スル書多シ、然レモ、或ハ園藝盆玩ニ止マリ、或ハ名稱形狀ニ止リ、或ハ畫譜ニ

止リ、栽培ノ書アルヲ見ズ、依テ淺劣ヲ省リシス、諸書ヲ參考シ、聊實驗スル所ヲ併記ス、竹ハ細大トナク、其需用極メテ多シ、近時農工ノ業、日ニ進ミ月ニ盛ナルニ從テ、竹ノ供給愈多久、東京府下ノミニニテモ、一ケ年ノ販額、明治十一年ノ調査大小ノ竹八拾三万四千四百四拾四束、價金拾貳万六千三百八拾圓餘、需用ノ多キ知ルベシ、從テ竹林培養ノ下ヲ問フ者歎カラズ、依テ當初必需ノ用多キモノヲ録シ、次テ各種ニ及ブ、竹ハ暖地ヲ好テ能ク蕃茂スレドモ、近時栽培ノ術、進歩セシヨリ、漸次寒

地ニモ栽植スルニ至レリ、竹ノ種類ヲ大別シテ
 二トス、第一ヲ用材竹トス百般ノ用ニ供スベキ
 モノヲ云フ、第二ヲ奇觀竹トス、植エテ庭園ノ粧
 飾トナシ、人目ヲ歡バシムルニ過キザルモノト
 ス、
 佛國博士「ジュボン」氏嘗テ余ニ告テ曰ク、凡ソ草
 木成長ノ早キモノ、少シトセズ、然レドモ、竹ノ如
 ク成長ノ速カナルモノアラズ、竹ハ一夜ニ六尺
 以上長ズト、竹ハ當初軟筍ノ時ハ、鞭根ヨリ養ヲ
 得テ發生スト雖、凡旬日間、七八尺ヨリ丈餘ニ

達シ、其鬚根自ラ土汁ヲ吸食スルニ及デハ、其發
 生力殊ニ熾ニシテ、每節間、駭然舒長ス、是レ一夜
 ニシテ、六尺ノ伸長ヲ見ル所以ナリ、樹類ニ至テ
 ハ、成長早キモノモ、一年ニシテ、六七尺伸長スル
 ニ過ギズ、又移植ノ後、十年ヲ經ルニ非レバ、薪炭
 林ト雖、凡一回ノ收利ヲ見ル能ハズ、竹ハ適地ニ
 植エテ、培養宜キヲ得レバ、數年ニシテ、深林ヲ成
 シ、年々伐採シ得ルヲ以テ、竹林一年ノ收益ハ、樹
 林ノ十年乃至十五年ニ比スベシ、依テ竹ノ價格
 ト收益ヲ左ニ掲ケ、竹林培養者ノ一考トス、

目通一尺廻り以上	金壹圓ニ付	一本内外
同 八九寸廻り以上同		二本内外
同 七寸廻り	同	四本
同 六寸廻り	同	六本
同 五寸廻り	同	十本
下等目通五寸以下ノ竹林	一畝歩	金壹圓
	一反歩	金拾圓
	一町歩	金百圓

中等目通六寸以下ノ竹林
 一畝歩 金三圓
 一反歩 金三拾圓
 一町歩 金三百圓

上等目通六寸以上ノ竹林
 一畝歩 金五百圓
 一反歩 金五拾圓
 一町歩 金五百圓

右ハ毎年、苦竹、淡竹林ノ筍、筍、及ビ籜ノ收益ハ大略ナリ、此他、紫竹、紫竹筍、及ビ江南竹筍ノ收益ニ至テハ之ニ倍蓰スルモノアリ、故ニ山麓、嶮間、池傍、澤

畔原野圃外堤上塘頭皆栽へテ利用厚生ノ源ヲ
 開クベシ又之ヲ庭上窓外ニ栽レバ其幽翠清陰
 愛スベシ之ヲ盆ニスレバ其秀雅賞スベシ加之
 碧窓綠房ニ棲息セバ疴ヲ避ケ神ヲ養フノ効歟
 シトセズ余是ニ於テ雅俗共ニ賞スルノ宜ナル
 ヲ知ル古人云フ何可一日無此君耶今此ノ編ヲ
 草スルニ於テモ亦云フ

筍 俗名多けのこ

筍ハ和名タカシナカラタマスバノ子漢名筍又
 筍漢ノ異名筍竹萌竹胎竹子箒初筍和漢三才圖

會ニ筍ノ生スル旬有六日而齊母故竹謂如母草
 云々又曰竹有雌雄シウロクニチ但看根上第一枝シウロクニチ雙生者必雌
 也乃有筍行鞭時堀取嫩者謂之鞭筍冬月堀大竹
 根下未出土者爲冬筍以爲珍品又和漢三才圖繪
 凡食筍者譬如治藥得法則益人反是則有損採之
 宜避風日見日則本堅入水則肉硬カハレキ脱殼煮則生味
 生着オホキ又則失柔煮之宜久生則必損人味オホキ發者戟人
 咽先以灰湯煮過再煮去發味惟以苦竹筍爲最貴
 按ズルニ苦竹ハ竿ヲ主トシテ筍ヲ主トセズ苦
 竹ノ筍ハ味苦辛ト諸書ニアレドモ筍ノ佳味ナ

ルハ苦竹ヲ優レリトス、故ニ苦竹ノ筍ヲ甜苦筍ト稱ス、但シ苦竹筍、半夏生ヲ過ギテ、生ズルモノハ、毒アリトシ、東京地方ノ人、多クハ之ヲ食ハズ、又半夏生ノ節ヲ過ギテ生ジタル竹ハ、良材トナラズトシテ、西京地方ノ人多ク食用ニ供スト、是レ東西趣ヲ異ニスル所ナリ、

苦竹ハ、須ク材用ヲ主トシテ、食用ヲ後ニスベシ、筍ノ多肉肥満ナルハ江南竹ニ及バズ、故ニ筍ノ收益ヲ主トスルニハ江南竹ヲ養成スルヲ最良トス、筍ノ効用及ビ製法等江南竹ノ條ニ録ス、

竹枝

竹枝ハ、藩籬トナシ、藩トナシ、魚簞トナシ、蔓草類ヲ纏フノ柱トナシ、其他使用多シ、

近来製塩家ノ粹屋ニ用ヒル堆朶ハ、竹ノ細枝ヲ以テ第一トセリ、蒸發ノ度速カニシテ保存最久シキニ堪ルト云フ、

海苔ヲ培養スル筵立ニ用ユルハ、櫛櫛、櫛櫛、竹ノ枝ナレドモ、樹枝ハ一ケ年間用ヒタル後ハ、廢物トナレドモ、竹枝ハ之ニ反シ、三年ニ至ル迄、用ルモ妨ナキノミナラズ、竹枝二年以上ノモノニ生ジ

タル海苔ハ、樹枝ニ生ジタル者ヨリ海苔ノ色澤
詢ニ優レリト云フ、
牡蠣ヲ植ルニハ、竹枝ノ附シタル竹ヲ樹テ之ニ
牡蠣ヲ産セシム、樹枝ハ早ク腐壞スレドモ、竹枝
ハ其患ナク、最モ牡蠣ノ産殖ニ宜ク、又牡蠣ヲ採
收スルニ臨テ、剥脱シ易クシテ、能ク久キニ堪ル
ト云フ、
海髮ヲ採收スル者、毎歲六月、苦竹ノ枝ヲ剪リ、數
十本ヲ束子、石ヲ挿込ニ水底ニ沈メ、繩ヲ以テ引
上ゲ、竹枝ニ懸ルモノヲ採收シテ、之ヲ製ス、

籐

苦竹ノ籐ハ、淡黄色ニシテ黒點アリ、大ナルモノ
ハ巾一尺五六寸、長二尺餘ノモノアリ、籐ノ需用
モ亦極ノテ多シ、籐笠、籐履、鼻繩、皮鞋、版摺ノ刷牙
ヨリ鳥獸魚介ノ肉、其他、餅飴、菜、菓ニ至ル迄、各般
ノ物ヲ包裹スルニ用ユ、籐ヲ高トスル者東京府
下數十戸、一ヶ年ノ販額萬ヲ以テ數ルニ至ルモ
ノアリ、但シ上等ノ籐履、及ビ木履ノ表ニハ竹枝
ヨリ脱シタル小籐俗ニ枝籐ト稱スルモノヲ撰
用ス、其色素白、昔時、皮鞋ト爲スモノ、及ビ方今木

履表被トナス、籜ノ事、カハシロダケ、ノ條ニ評ナ
リ、

節

和漢三才圖會云、竹中隔、而不通者、曰節、和訓
布之
草本性譜ニ、竹節ハ月ノ盈虧ニ從フ、上旬ニ截レ
ハ、節ノ正中凸ク、中旬ニ截レハ平ニ、下旬ニ截レ
ハ凹ナリ、晦望ニ截レハ平ナリ、之ヲ檢スルニ、大
率雄竹凹久、雌竹凸ナリト云ヘリ、此説、世俗茶家
杓ヲ剪リ、活花師、花筒ヲ截ル等、此事ヲ以テ傳授
トスト聞ケドモ、今望前ニ一竿ヲ截リ、望後ニ一

竿ヲ截リ割テ之ヲ視ルニ、全幹中ノ各節、或ハ凸
或ハ凹、ナカホ或ハ平、ヒラ其状均シカラズ、又新竹ヲ截リ、又
老竿ヲ截リ、之ヲ試ムルニ、根上七八節ハ平ニ、以
上二三節ハ、凸ク、以上五六節、或ハ平或ハ凹クノ
均シカラズ、又筍ヲ割テ之ヲ試ルモ亦然リ、竹筍
既ニ成熟シテ全幹堅實ヲ成スノ後、月ノ盈虧ニ
依テ毎ニ其節ヲ凸凹スルノ理アラシヤ、鰕蟹ハ
月ノ盈虧ニ依テ肥瘠アリト云フ動物ニ在テハ
此感ナシト謂フヲ得ズ、竹節豈ニ是レト同ジカ
ランヤ、流俗妄ヲ傳フ亦甚シト謂フベシ、

竹根

竹譜詳録云、竹根二種、凡散生之竹、先一年行根、而敷生、次年出筍而成竹、叢生之類、不待行根、而頻年出筍、成筍、然須至次年方生、枝葉也、案ズルニ根莖即鞭根ノ傍引シテ鞭根ノ節上ヨリ筍ヲ生ズルモノヲ散生類ト稱ス、苦竹、淡竹、江南竹、含朶竹、寒山竹、箱根竹、千里竹、紫竹、寒竹、人面竹、篤竹、箬竹、五枚篠ノ類是レナリ、此類ハ鞭根上、筍芽僅カニ萌出スル時ニ掘テ鞭根ヲ移セバ皆能ク生ズ、鞭根ナクシテ、母竹ノ根上ヨリ筍ヲ生ジ、又ハ母竹ノ

根末ヨリ筍ヲ生ジ、又ハ母竹ノ竿節ヨリ筍ヲ生ジテ、竿ヲ爲スモノヲ叢生類ト稱ス、泰山竹、鳳尾竹、孝行竹、砂古丹竹、及ビ金山竹、等是レナリ、又含朶竹中ニモ叢生ノ類アリ、此類母竹ノ新舊三四竿ヲ移セバ能ク蕃生ス、竹根ハ江南竹、及苦竹、淡竹ノ如キ大幹ヲ成スモノト雖モ、初ノ鞭根ノ小ナル節上ヨリ筍芽ヲ發シ、寸許ニシテ忽チ肥大ニ變ジテ、大筍ヲ成スモノナリ、而シテ大抵地下ニ在テ鬚根ヲ密生スル節數ハ六節ヨリ十二節トス、其間節々相接シテ

無數ノ鬚根ヲ蕃生ス、又瘠地ニ生ジ、或ハ上根ニシテ小幹ヲ成スモノハ、大抵地中六節アリ、又含朶竹類、及ビ叢生類ニ至テハ、三節ヨリ九節ニシテ餘ハ地上ニ出ヅ、但シ地淺クシテ鬚根ヲ生ズル能ハザルモノハ、地上ニ於テ鬚根ヲ出スモノアリ、是レ等ノ竹林ハ、土泥ヲ培シテ可ナリ、凡ベテ竹ハ、三數ヲ以テ成ル、者多キニ居ト云フ、竿ハ三年ヲ經テ成熟ス六年ニシテ老竿トナル、三十年又ハ六十年ニシテ花ヲ開キ實ヲ結ブ、節ノ數、皆三ヲ以テス、故ニ竹根ノ地下ニアル淺キ

モノハ、三節又ハ六節、深キモノハ、九節ヨリ十二節トス、竹幹ノ全節最長ナルモノモ、六十節或ハ六十三及ビ六十六節トス、長短大小アリト雖、凡テ大概皆三數ヲ逐テ成ラザルモノナシ、

竹葉

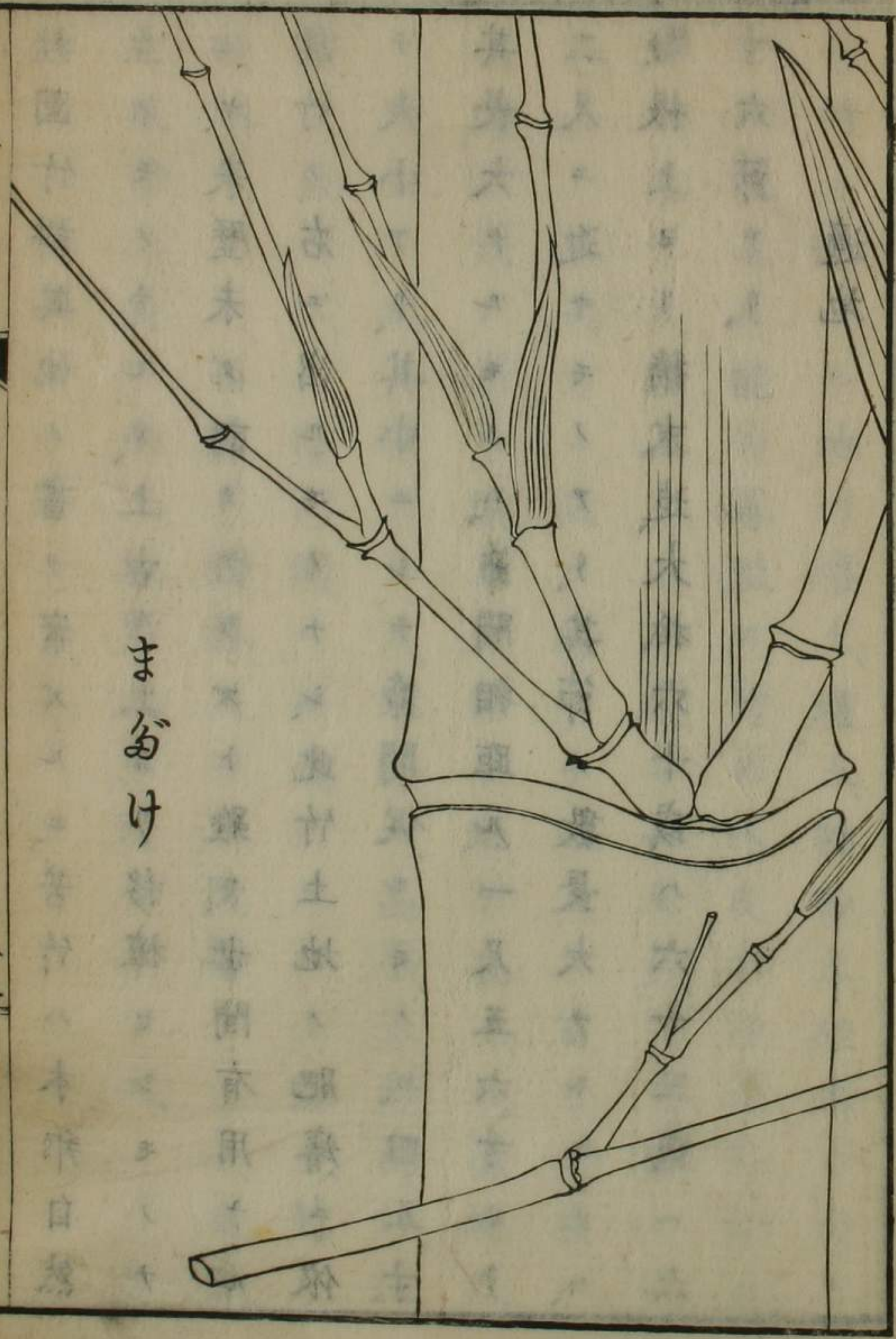
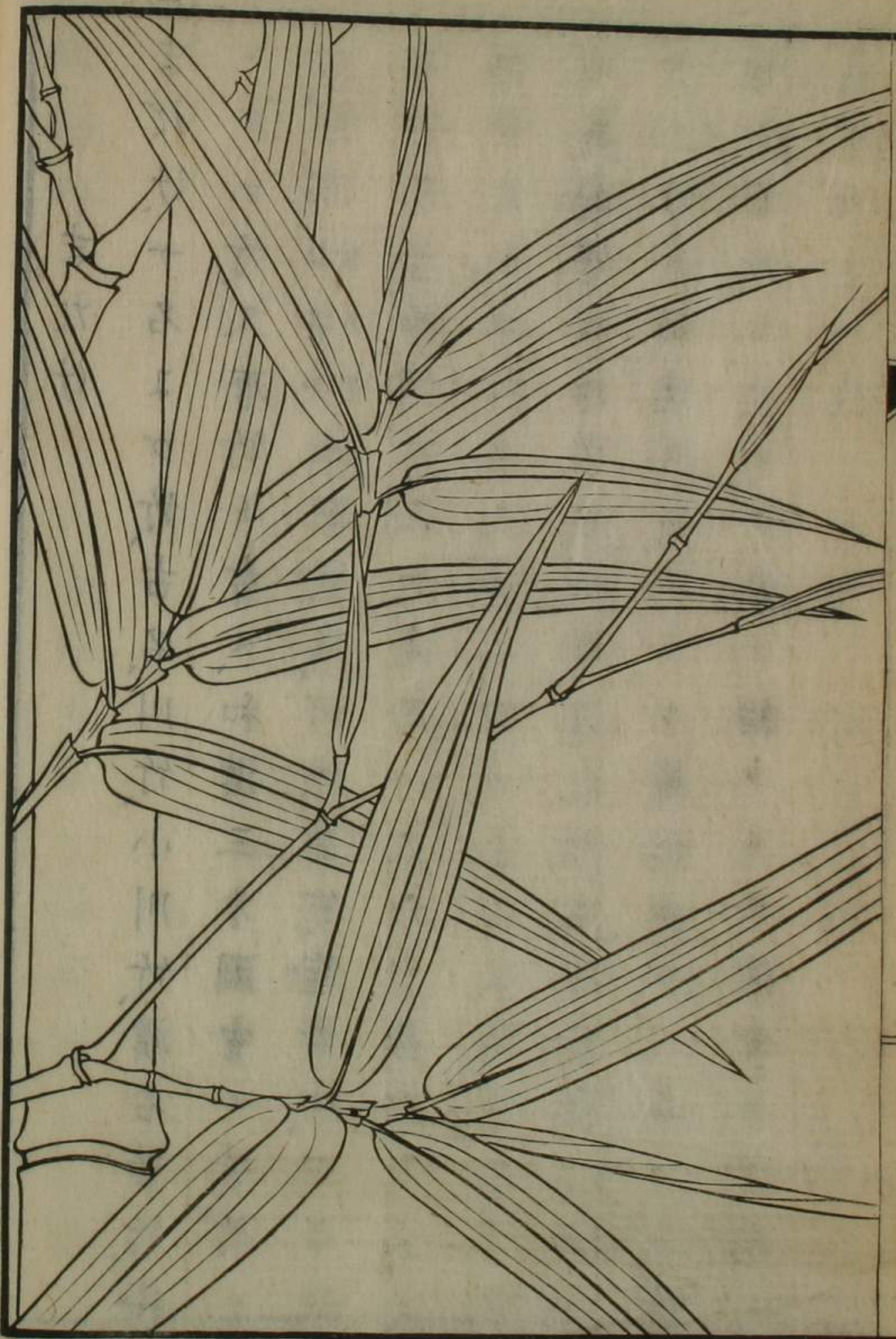
竹葉ハ、漢醫ノ灌洗藥ニ用ヒシモノナリ、今ハ用ユルヤ否ヲ知ラズ、然レモ、竹葉ノ効用、自今益多カルベシ、生薑、蘘荷、等ヲ作ルモノ、竹ノ落葉ヲ以テ之ヲ掩ヒ、根邊ヘ日光ノ直射セザル様ニシテ、作レバ、其色鮮紅ニシテ、一層ノ價ヲ増スベシ、又

多ク竹ヲ伐採スル時ハ竹枝ヲ積デ葉ヲ悉ク脱
 セシメ之ヲ多ク集メテ竹林中ニ散布スレバ化
 シテ好良ノ肥料トナルハ勿論又之ヲ他ノ田畑
 等ニ散布シテ著シキ効アリ

総論終

まだけ

まだけ一名ニダク竹古名川竹小川竹漢名苦竹俗
 ニガラ竹又唐竹ト書ス和漢三才圖會ニ苦竹ハ
 真籜竹和名加波多計本朝式爲河竹其筍籜紫斑味苦辛
 其竹色青節間不促大者周一尺六寸長六七丈一
 種苦竹生瘠地者大者三四寸長二丈許節高溝深
 以爲墻篔或漆家爲晒布帛之柵名茂架籬上略曰賀里
 ガラ竹ノ稱蓋シ是レヨリ轉化セシナルベシ唐
 竹ト書スルハガラ竹ノ稱アリテ後字ヲ當嵌シ
 ナラン



まぶけ

日本竹譜
 卷之四
 十二
 直根度歳反

桂園竹譜其他ノ書ヲ案ズルニ、苦竹ハ本邦自然
生ノモノナルカ、上古漢土ヨリ移植セシモノナ
ルヤ、來歴未ダ詳カナラズト雖モ、世間有用ナル
該竹ノ右ニ出ルモノナシ、此竹土地ノ肥瘠ニ依
テ大小アリ、其小ニシテ節間促ルモノハ、四五寸、
其長大ナルモノハ、節間相距ル一尺五六寸ヨリ
二尺ニ近キモノアリ、其節ノ數長大ナルモノハ、
鞭根上ヨリ梢末迄、大抵六十或ハ六十三或ハ六
十六節アリ、

適地

苦竹ニ適スル地ハ壤土、壙土、粘砂土、硅土ノ交リ
タル地、最モ能ク蕃殖ス、竹ノ外皮ノ滑澤堅勁ナ
ルハ、凡ベテ硅土ヲ以テ成レルモノナリ、故ニ化
學士ノ説ニ、竹ノ灰ハ総ベテ硅土ニ富リト、故ニ
砂礫ノ混ジタル壤土ノ深キ地ヲ良トス、濕地及
ビ礫固ノ地ハ可ナラズ、地勢ハ、高原、平野、斜地、峻
崖ヲ論ゼズ、川傍河側ニモ栽ユベシト雖モ、竹ハ
暖地ニシテ、西南ニ樹林、又ハ丘陵等アリテ、自然
ニ風除ヲ爲ス如キ地ヲ最モ適セリトス、

肥料

竹ノ肥料ハ、犬、羊、猫、鼠、其他獸類ノ死骸、及ビ牛馬ノ皮、骨、爪、等ヲ最モ可トス、稻、麥、粃、糠、草木ノ腐壞セシモノ、及ビ灰、塵、芥、堆肥、厩肥、人馬ノ糞水等、礫ナキ所ナラバ、石灰ヲ施スベシ、竹ニ忌ムモノハ、海草類、魚ノ洗汁、及ビ食塩トス、黒菜ノ煎汁、及蕎麥、稗等ヲ散布スレバ、滿林皆枯ル、ト云フ、

移植

移植セント欲スルニハ、後來蕃殖蔓衍シテ、他ニ障碍ナキ地ヲ撰ブベシ、移植スル竹ハ、二三年生強壯ノ良竿、二三本乃至四五本、今年ノ新竹一二

竿アルヲ宜トス、而シテ^{オタケ}鞭根ヲ損傷セザルヤウ共ニ掘リ採リ来テ移植スルヲ可トス、季節ハ、陰曆五月十三日ヲ竹酔日又竹迷日ト稱シ、移植ノ好季節トスレドモ^{タケノコハルマニ}出筍前及ビ極寒極暑ノ外ハ何時移植スルモ可ナリ、最モ梅雨中、又ハ細雨中、又ハ降雨ノ前ヲ良トス、何レノ地方ニテモ華氏ノ四十五度、攝氏ノ七度以上ノ時ハ、移植シテ妨ケナシトス、移植スルニ^ハ其地ニ方三尺辯ノ穴ヲ掘リ、底ニ^ハ粃、糠、灰、落葉ノ腐壞セシモノ、厩肥、堆肥、陳藏ノ人馬糞等、凡深サ一尺入レ、其上へ

五六寸細土ヲ敷キ、又肥料ヲ入レ細土ヲ敷キ斯
 クスル三四回之ヲ植ヘ、肥料ヲ入レ細土ヲ以テ
 之ヲ覆ヒ、平地ヨリ五六寸ノ高サニ至リ能ク細
 土ヲ以テ埋メ、水ヲ灌ギ、鋤ヲ以テ壓鎮シ、左右ヨ
 リ支柱ヲ爲シ、風ニ動轉セザルヨウ注意スベシ、
 竹林ヲ速ニ蕃茂セシムルニハ、一反歩ニ三十株
 ヲ植ヘ、冬月多ク肥料ヲ施スベシ、移植ノ方法宜
 キヲ得レバ、四五年ニシテ深林ヲ成スモノナリ、
 若シ多ク移植スルヲ得ザレバ、西北隅ヘ移植ス
 ベシ、竹ノ西北ヨリ東南ニ蔓延スルノ性アリテ

漸次蕃殖スレバナリ、汝南圃史ニ竹性向西南ト
 アレドモ、經驗スルニ、東方ヲ塞グ障害物ナキ時
 ハ東南ニ向クヲ常トス、秘傳花鏡種竹有四字訣
 疎密、淺深、則盡之矣、疎者謂三四尺方種一顆欲其
 土虛易於行鞭也、密者大其根盤、每顆須三四竿一
 堆使_ニ其根密_ニ自相維持_セ也、淺者入土不甚深也、深者
 種時雖_モ淺_ト、每用_ニ河泥_ヲ厚_ク壅_レ之_ヲ、則深也、又佐藤信淵翁
 ハ凡竹ヲ植ルニ、一人ニテ一株ヲ植レバ、十年ニ
 シテ蕃茂シ、十人ニテ運搬スル大株ヲ植レバ、一
 年ニシテ蕃茂スト云ヘリ、竹ヲ移植スルニ注意

スベキハ、母竹ノ堀採ニ際シ、竹根ヲ損傷セズ、又
 鞭根ヲ毀傷セズシテ根傍へ多ク宿土ヲ留ムベ
 シ、又前叢ニアリシ時ノ南北ノ向ヲ記シ誤ラザ
 ルヨウニ植へ、鞭根ハ必ず東南ノ方ニ向テ植ユ
 ベシ、移植ハ降雨前、或ハ細雨中ヲ最良トスレド
 モ、移植後早天ナラバ、降雨アル迄、毎夕根邊へ灌
 水スルヲ可トス、竹ヲ遠國ニ移植スルニ法アリ、
 十月十一月頃、竹叢ヲ掘リ、鞭根ノ每節ニ小筍ノ
 附シタルモノヲ撰ミ、利刀ヲ以テ、株ヨリ剪リ放
 シ、鞭根ノ切口へ、灰又ハ土ヲ塗り、之ヲ損傷セザ

ルヨウ藁ニ包ミ、又ハ之ヲ巻キテ桶箱等ニ入レ、
 乾キタル土ヲ入レ、海風及ビ濕氣ノ當ラヌヨウ
 ニ、荷作シテ之ヲ遠隔ノ地ニ送り、高燥ノ地ヲ撰
 デ、深ク掘リ、肥料ヲ下ニ良土ヲ上ニ敷キ、鞭根ヲ
 植ヘテ細土ヲ厚ク覆ヒ置ケバ翌年ニ至リ、筍ヲ
 生ジテ、竹林ヲ成スモノナリ、是レ嘗テ實驗スル
 所ナリ、但シ鞭根ニ附スル每節ノ小筍ハ、嫩弱ナ
 ルヲ以テ、濕氣ヲ受レバ腐壞シ易シ能ク注意ス
 ベシ、

保護

竹林ハ保護宜シキヲ得レバ、樹林ト同ジク、不盡
 産ト云フベキモノナレドモ、之ヲ保護スル暖地
 =在テハ、伐採ノ過度、古竹ノ剪伐等ニ注意シテ、
 怠ラザレバ、蕃茂シテ常ニ深林ヲ成ス、然レハ各
 地ノ林相ヲ視ルニ、往々古竹ノ剪伐ニ怠リテ、林
 ヲ枯シ、又ハ伐採ノ過度ヨリ竹林ヲ枯瘦セシム、
 故ニ竹林ハ疎ナル可ラズ、又密ニ過グ可ラズ、伐
 採過度ニシテ、竹竿扶疎ナレバ、日光林中ニ射映
 シ、竹竿ハ黄色ヲ帯ビ、肉薄ク、節凸ク、林中乾燥シ
 テ肥養分ヲ蒸散シ、漸々良竿減ジ、遂ニ竹林ヲ枯

瘦セシムルモノナリ、故ニ四年以上ノ古竹ヲ久
 シク存スルハ宜シカラズト雖モ、恒ニ林中蔚蒼
 トシテ白晝モ深蔭ホドニ茂スベシ、日光射映セ
 ズ、林中ノ土恒ニ濕フテ、乾カザレバ、落葉、塵芥等
 自然ニ腐化シテ、絶ヘズ肥養分ヲ釀成シテ已マ
 ス、竹竿ハ深綠色ヲ現ス、斯クノ如キ竹林ハ漸次
 肥大ナル良竿ヲ生ジテ、美觀ナル林相ヲ成スモ
 ノナリ、又寒地ニテ竹林ヲ保護スル法アリ、之ヲ
 叢卷ト稱ス時々大雪ノ降ル所ニテハ、之ヲ保護
 シテ、折傷枯死ヲ防クノ法ナリ、毎歳十月頃ニ至

レバ、林中ニ於テ竹ノ疎密ヲ考ヘテ、凡ソ四坪位
ヲ一纏メトシテ、根上四五尺ノ處ヨリ、繩ヲ以テ
之ヲ纏ヒ、漸次梢末マデ卷上ゲテ、圓錐形ニ爲シ
置ケバ、烈風積雪ニモ、撓折スルノ憂ナシ、而シテ
之ヲ卷クニ巧拙アリテ、拙キ者ハ數人掛リニテ
之ヲ卷クモ、風又ハ雪ニ遇ヘバ忽チ一體ニ倒レ
テ却テ害トナルヲアリ、巧ナルモノハ一人ニテ
之ヲ仕上ク、即其下ヲ纏フ時ハ、梯ヲ用ルモ漸ク
上邊ニ向ヘバ、最初纏ヒタル繩ニ足ヲ懸ケ、追々
ニ上リテ之ヲ卷ケリ、大風雪ニ遇フモ、一度モ倒

レシトナク、翌春、雪ノ消ユル頃ニ至レバ、竿頭ニ
鎌ヲ附ケ之ヲ用テ、下ヨリ繩ヲ切り置ケバ、風ニ
揺クタビニ自ラ落テ、各竿開放、依然綠色ヲ呈ス

培養

竹ハ鞭根アルモノト、鞭根ナキモノトアレドモ、
苦竹ノ如ク長キ鞭根アル類ハ、俗ニ上根ト稱シ
動モスレバ、地上ニ匍匐シテ、秋ニ至リ根末ニ筍
ヲ現ハスモノナリ、俗ニ之ヲ鞭筍ト稱シ、採リテ
之ヲ食フ者アレドモ、竹林ヲ培養スルニハ、鞭筍
ノ生ズル時ハ、之ヲ掘リテ深ク土中ニ埋ムルヲ

可トス、又古キ竹叢ニテ鞭根地上ニ匍匐スル多
キヲ認メバ、時々舊根ヲ掘リ去リ、肥料ヲ投入シ、
叢中へ沃土^{コソチ}五六寸ヲ敷クベシ、三四年間斯ク爲
ス時ハ竹叢一變シテ、良幹ヲ生ズルニ至ル、竹ハ
砂礫^{コイシ}ノ交リタル、深キ土ヲ可トシ、又地中軟膨^{カク}ニ
シテ根莖即鞭根ノ旁行蔓行シ易カラシムルヲ
要ス、故ニ培養ニハ、古キ斷株^{ハビヨリ}ヲ掘リ除キ、勉テ地
ヲ軟膨ニシ、冬時ニ肥料ヲ多ク施シ、又獸類ノ死
體アラバ、之ヲ叢中各所ニ埋ムベシ、竹ハ六十年
ニシテ花ヲ開キ實ヲ結ビ竹林枯レテ根ヲ易フ

ト諸書ニ散見ス、又中央印度山林草木譜抄譯ニ、
大抵竹ハ三十年ヲ經テ開花ス、則一千八百〇二
年、一千八百三十二年、及び一千八百六十二年ト
三十年ヲ隔テ、開花セシ記録アリト、今人竹ノ開
花結實ヲ見テ凶歉ノ兆ナリトシ、又枯死ノ期ナ
リトシテ放置スルハ甚謂ナキモノトス、今ヲ距
ル三十四五年前、余郎内、及び近傍ノ竹林ニ花ヲ
開キ實ヲ結ビタルヲアリ、翌年ヨリ大竿ハ枯死
シタレドモ、小竿ハ依然生存シタリ、依テ叢中ヲ
開鑿セシニ、舊斷株^{コキ}、舊鞭根^{コキ}、累々交錯ス、之ヲ除去

シ人糞堆肥、及ビ灰糠等ヲ多ク埋メ置キタルニ、
漸次良竿生ジ、結實ノ年ヨリ六七年ニシテ大竹
矗立シテ緑林ヲ成スニ至レリ、故ニ六十年又ハ
三十年ニシテ、開花結實シテ、枯死スルトノ説ア
レドモ、到底栽培到ラズ、竹林蕃茂シテ地中ノ滋
養分ヲ吸食シ、加之舊根縛紮シテ凋衰ヲ来シ、凋
衰極ツテ、枯死セントスルニ臨ミ開花結實スル
ニ非ザルナキヲ知ランヤ、竹實ノ事後ノスバ竹
ノ條ニ出ツ故ニ竹ヲ培養シテ、良林ヲ爲ント欲
ヒバ勉メテ根莖即チ鞭根ノ強大ナルヲ主トシ

テ、培養スベシ、鞭根アル竹類ハ、鞭根肥大強壯ナ
レバ必大筍ヲ生ジ、良竿巨竹ヲ成スモノナリ、又
竹林中ニ、萩、櫛等ヲ雜植シテ防護樹ト稱シ、雪折
ノ害ヲ防クノ説アレドモ、實驗者ハ然ラズトス、
叢中樹木ヲ點在スレバ、吹風ノ時竿頭ハ樹枝ニ
損傷セラル、ノミナラズ、新竹及ビ筍ハ爲ニ挫
折スルヲアリ、又積雪ノ時竹竿ハ樹枝ニ支ヘラ
レ撓ム能ハズシテ折裂スルモノ多シ、且莖ノ
地ハ筍ノ生育宜シカラズ、

伐採

竹ノ伐採ハ、法ノ如ク三ヲ存シテ、四ヲ伐ルベシ、三年目迄ノ竹ヲ存置シ、四年目ノモノヲ伐ルベシ、四年目ニ至レバ、竹竿堅韌充實ス、又六年ヲ經過スレバ、外皮淡黄色ヲ帶セ、老幹ニ至ルモノナレバ、須ク四年ノモノヲ伐ルベシ、竹ヲ伐ルノ好季節ハ、中秋ヨリ中冬トス、俗ニ八月ノ暗夜陰曆八月廿日後ノ一ニ伐リタル竹ハ、蠹害ナク永ク保ツト云フ、故ニ竹ハ初霜初メテ降ル頃、即十月ヨリ翌年一月中ヲ最良トス、竹ヲ蟲害ナク保存セシムルニハ、節ヲ貫キ又ハ

之ヲ割リ、硫酸鐵水、又ハ石灰水ニ漬ケ、或ハ之ヲ灌キ置ケバ、其材永ク需用ニ供シテ、蠹害腐朽ノ憂ナシ、又竹ヲ伐採スベカラザル時アリ、春ノ八十八夜ヨリ立秋迄トス、此時ニ伐リタル竹ハ脆弱ニシテ蠹害多ク用ヲ爲シ難シ、三才圖會ニ凡、斫竹、秋爲勝、冬次之、如春夏性脆弱而易蛀、俗謂木六竹八、言伐木六月、伐竹八月可也、凡竹ハ勉メテ其小ナルモノヨリ剪伐シテ、大竹ヲ存スレバ、竹林ハ漸次繁茂シテ、益良竿大竹ヲ生ズルニ至ル之ヲ伐

ルニ鋸ヲ用ユルヨリ手斧又ハ鉋ヲ以テスベシ
 而シテ跡ノ斷株ハ必ズ鉋ヲ以テ破碎シテ速ニ
 腐朽セシムベシ、然ラザレバ、舊根地中ニ累堆シ
 テ、根莖ノ匍匐ヲ妨ゲ、良筍ヲ生ズルヲ得ズシテ、
 竹林ヲ衰頽セシムルニ至ルノ恐レアリ、

竹竿

竹竿ノ効用極メテ多シ、本邦ニテハ銅鐵ノ管ニ
 代用シ、或ハ架シ或ハ埋ノテ水ヲ行ルニ用ユ、之
 ヲ筧、又竹樋ト稱ス、大ナルモノハ、筏ニ作り深田
 ノ種植ニ用ヒ或ハ葦ヲ植ルノ舟ニ用ユ、支那福

洲ノ沿岸ニテハ、鷓匠ハ筏舟ト稱シ、魚類ヲ漁ス、
 其法大竹十二個ヲ排列シ藤蔓ヲ以テ編ミ舟尾
 ニ櫂ヲ設ケ、自在ニ進退スト其他承漏トナシ、藩
 籬トナシ、屋瓦トナシ、柱トナシ、椽トナシ、床トナ
 シ、籬竿トナシ諸植物ノ支柱及ビ棚トナシ、大小
 ノ籠茨類ヲ造リ、大小桶ノ籬其他軍用及ビ百般
 ノ用、一々枚舉ニ遑マアラズ、
 もうそうちく
 もうそうちく
 俗ニ孟宗竹、一名あせ分け、漢名江
 南竹、異名狸頭竹、又猫彈竹、又猫兒竹、又麻頭竹、江

南竹ハ節間短ク、質軟ニシテ、肉厚ク、葉形短小ニシテ薄シ、新竿ニハ微毛アリ、長ズルニ及デ淡緑年ヲ經レバ黄色ヲ現ハス、江南竹ハ元漢土ノ種ナリ、琉球ヲ經テ本邦鹿兒島ニ傳入、茲ニ一百四十八年、其起原ヲ詳ニスルヲ得タルハ、嚮ニ山高信離氏鹿兒島巡行ノ際、仙巖別館江南竹記ヲ寫シ歸ルニ由ル、其記ニ曰ク、仙巖別館江南竹、淨國公得テ于琉球國ニ而所植也、初淨國公退老之後、聞琉球有此竹、以謂是我國所不有也、可以植矣、元文元年三月下命於琉球使致此

竹二十顆、每顆四五竿、五月琉球植之於兩盎、以獻曰頃歲得于漢土而未蕃衍焉、因獻以二顆、於是植之於仙巖別館、以珍異之、俗呼曰孟宗竹、其後此竹繁殖而分種、移植漸溥、本藩終及他境、元文以來一百年于此、自東西兩都至海內諸州、雅俗共賞、而莫不遍植焉、此竹也、利用之多、勝於餘竹、筍則最爲珍異、不獨景致可愛也、雅俗之賞、不亦宜耶、歲在丁酉秋、今公慮其久而失傳也、命臣秀堯記事、由以誌諸石、臣秀堯拜手奉旨、竊以謂嘗見仙巖之竹、既久而益茂、拂雲冲霄、佳色靄然、於戲、此竹流於海內也、既

日本竹譜 卷之七 廿三 眞長慶或反

溥益於人事也甚多而推其所出實權輿仙巖則享此竹之利者皆淨國公之賜也後之觀之者可不感戴哉今公有命記其事由則此竹也待今公而益彰焉然淨國公之利澤與今公之善業可並馳而至不朽矣夫述於祖績仁明之道也今公之於此舉也其事雖瑣乎足以觀其休德光輝及於遠矣此竹亦榮哉是為記

天保八年丁酉秋九月廿五日

本府知國史館事臣五代秀亮謹撰

今ヤ本邦北陸道北海道ヲ除クノ外江南竹ノ點在セザル所ナシ竿ノ巨大筍ノ豐美外人ヲシテ

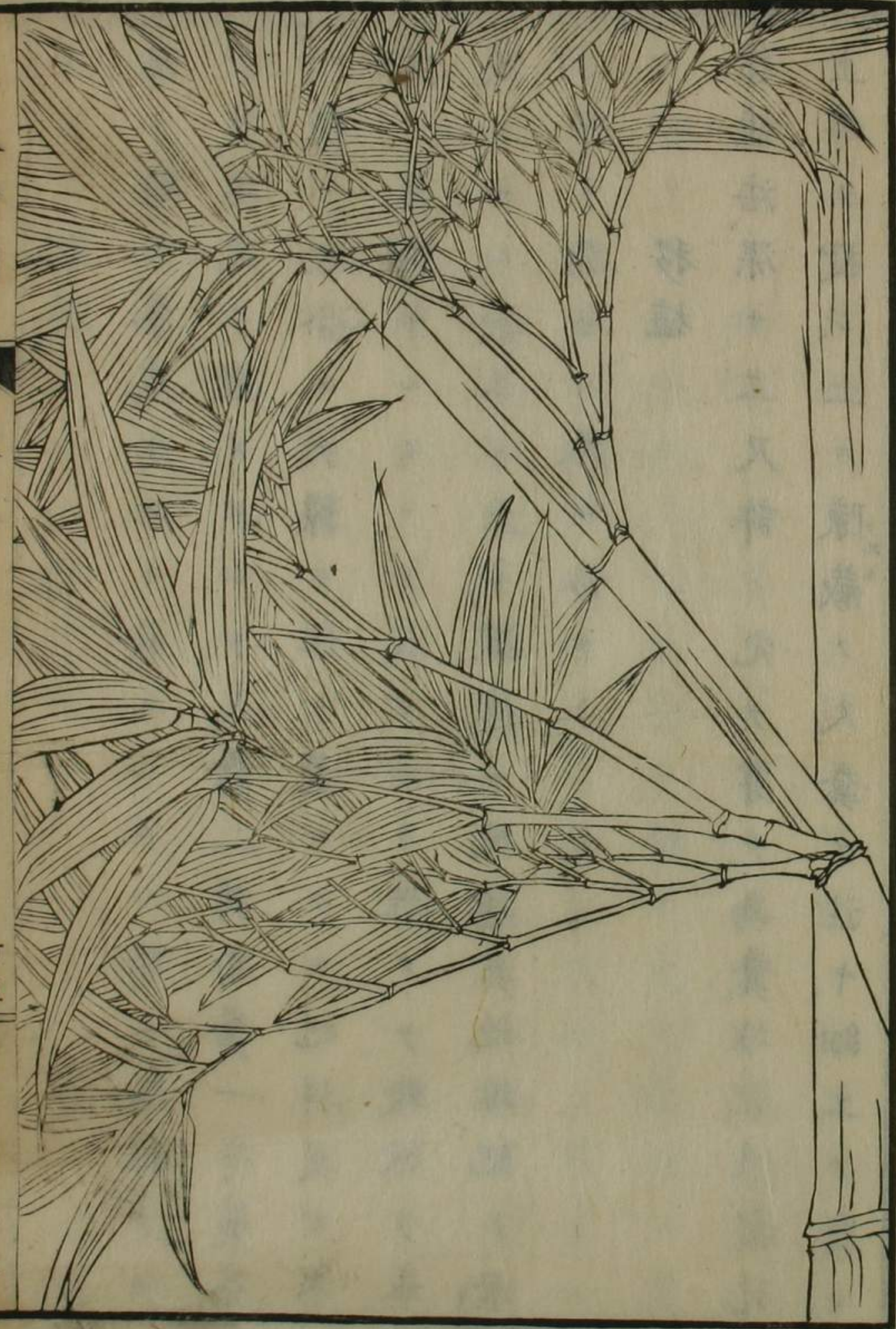
歎賞セシムルニ至ル當初移植ノ功偉ナリト云フベシ

適地

江南竹ハ温暖ニシテ軟膨ナル土地ヲ好テ繁生ス日向大隅薩摩地方ニ産スルモノ最モ巨大ニシテ幹圍三尺餘ニ及ブモノアリ東京地方ハ筍ノ收穫ヲ主トシテ栽培周到ナルヲ以テ能ク良筍ヲ産ス江南竹ヲ栽ルニ適スル地ハ多年耕耘セシ壤土深キ畑地ヲ最良トス濕地及ビ磽确ノ地ヲ忌ム

廿五

真無本 瘡片



真無本 瘡片

もうそうちく



肥料

專ラ筍ヲ養成セント欲スルニハ筍ヲ堀採リタル後、其穴ヲ埋メズシテ人糞二荷馬糞一荷藁芥一荷ノ配合ニテ豫テ作り置キタル肥料及ビ木葉ノ腐爛セルモノヲ投ジ、之ヲ埋メテ鞭根ヲ養成スベシ、秋冬ニ至リ、獸類ノ死體其他堆肥ノ漚汁等ヲ施セバ殊ニ妙ナリ、

移植

移植法、深サ二尺許ノ穴ヲ穿テ、馬糞堆肥、落葉化土等ヲ投ジ、上ニ陳藏ノ人糞ヲ注キ、細土ヲ覆ヒ、

竹株ヲ植ヘ細土ヲ以テ埋メ、竿頭ヲ地上八九尺ノ所ヨリ斜剪シ左右ニ竹木ヲ添ヘテ支柱トナシ、鋤ヲ以テ根抵ヘ土ヲ寄セ、輕ク之ヲ壓植シ置クベシ、季節ハ六月中ヨリ十月末頃迄ヲ可トス、就中梅雨中ヲ更ニ可トス、

保護

江南竹ハ筍ヲ採收スルヲ主トスルニハ、自ラ苦竹ト異ナル所アリ、第一地中ヲ軟膨ニスルヲ要ス故ニ人馬其他林中ニ出入スルヲ禁ズベシ、

第二 林中ノ乾燥セザルヤウ、藪草、藨菰ノ類ヲ敷テ保庇スルヲ良トス、故ニ林中各所ニ堆肥ヲ置クヲ最可トス、

第三 防寒ノ設アルヲ要ス、冬時北風ノ烈キ所ナラバ、藨又ハ藪ヲ以テ墻蔽ヲ爲スベシ、鞭根ヲ強大ニシテ筍ヲ多ク生ゼシムルニハ、新竹生ジテ筍ノ籜過半脱落シテ未ダ梢末ニ籜ノ存スル頃、筍ヲ以テ之ヲ震揺スレバ、梢ハ適宜ノ所ヨリ折レテ落ルモノナリ、筍ヲ專業トスルモノ皆此法ヲ用ユ林中ニ保存スベキ母竹ハ一反歩ニ六

七十株、每株二三竿、即チ竹數百五十本ヲ存スルヲ度トス

培養

江南竹ハ西南地方ノ暖地ニ在テハ敢テ糞培耕釋ニ勞セスシテ豊大ノ竿筍ヲ獲ルト雖モ、東北地方ニ於テハ、專ラ人ノ培養ニ依テ、巨幹良筍ヲ收獲スルモノナレバ培養ヲ勉ムルヲ要ス、

第一 林中ヲ開鑿シテ地下ヲ鬆弛ニシテ肥料ヲ豊ニシ、鞭根ヲ埋ルニアリ、三月ヨリ五月末迄筍ヲ掘採スルノ際、掘リタル穴ヘ馬糞、灰、糠、粃、粕

木葉堆肥等ヲ埋ノ置クベシ、江南竹ノ鞭根ハ、八月ヨリ十月頃迄ニ、六尺ヨリ一丈二尺許ニ横延スルモノナレバ、之ヲ毀損セザルヨウ、丁寧ニ開堀シテ、鞭根ノ地上ニ匍匐セントスルモノヲ地中凡二尺ノ所迄深ク埋メテ、人馬糞堆肥等ノ肥料ヲ充分ニ注ギ土ヲ覆ヒ、鞭根ヲ横ヘテ細土ヲ以テ之ヲ埋メ、鍬ヲ以テ輕ク壓鎮シ置クベシ、肥料充分、地中軟膨ニシテ、鞭根深ク埋藏スレバ、翌年良筍續々發生ス、又一法アリ鞭根ニ小芽ヲ發スル頃、即中秋ノ候、地ヲ二尺ノ深ニ堀リ、肥料ヲ

投ジ、地上ヨリ枕ヲ併立シテ、鞭根ノ進路ヲ遮リ、勉メテ鞭根ヲ屈曲セシメ、土ヲ掩ヒ人馬糞ヲ施シ置ケバ、翌年ニ至リ鞭根ノ屈曲セシ所ヨリ筍ヲ簇生ズ、是レ竹林狭少ノ地ニ施ス便法ナリ、

伐採

伐採ノ法、苦竹ニ同ジ、但シ季節ハ暮秋ヨリ初冬ニ限ル、他時ニ伐リタルモノハ、蠹害ニカ、リ用ヲナサズ、江南竹ノ大ナルモノハ水桶、火鉢トナシ、又花瓶、茶盆、烟草盆トナシ、片手^{サレ}桶^{ボウ}、澡盤^{ソウダン}トナシタルヲ目撃センコトアリ、

筍

筍ノ掘採ハ、未ダ地上ニ莖ハタザルモノヲ掘採レバ
 柔軟ニシテ味殊ニ佳ナリ、竹類中、食用ニ供シテ
 多肉豊美ナルハ江南竹ヲ最良トス、春復ノ間世
 人ノ嗜食スル一美菜トス、先年來、佛國人移植ヲ
 企テタレドモ、風土氣候ノ適セザル故ニヤ、未ダ
 蕃殖ノ報アルヲ聞カズ、尤江南竹ハ移植後五年
 ヨリ筍ヲ收穫スルヲ得レドモ、十年ヲ經ルニア
 ラザレバ、十分ノ竹タケ藪ヲ見ル能ハズ、十年以後ハ
 一反歩ニ付毎歲筍ヲ獲ル二千二百斤ニ至ル、本

邦江南竹、筍味ノ豊美ナルハ、佛國人、獨逸人ノ殊
 ニ歎賞嗜食スル所ニシテ、獨逸人某ハ凡百ノ蔬
 菜中此右ニ出ルモノナシト云フ由、斯ク内外人
 ノ嗜食スル多キ故ニ貯藏法モ進歩シテ罐詰或
 ハ鑊詰トナシテ販賣スルニ至レリ、

筍貯藏諸法

生漬法

筍ハ多量ノ剥ホツ篤タタ亞斯分ヲ含有スルモノナレバ、
 貯藏スルニ臨ミ、剥篤亞斯分ヲ除キ去ルヲ要ス、
 生漬法ハ筍ヲ掘採り來リ、鍋又ハ大釜ニ入レ、清

日本竹譜

卷之上

廿九 真無本卷上

水ヲ注加シテ之ヲ煎沸セシムル凡一時間、能ク
 煮熟スルヲ認メテ釜ヨリ取出シ、桶ニ清水ヲ盛
 リ、此中ニ放冷スル三時間、而シテ其籜ヲ去リ、二
 ツニ截斷シ、更ニ清水ヲ換ヘテ放冷スル二時間、
 之ヲ取出シテ能ク拭ヒ、鐵葉ノ罐ニ詰メ、之ニ熱
 湯ヲ注加シ、^{ハンダ}ヲ以テ蓋ヲ緝着シテ後蒸氣
 器ヲ以テスルニハ蒸籠ニ入レ、湯煎スルニハ大
 釜ニ入レ、華氏ノ二百二十度以上ノ熱ヲ與ル凡
 二時間、煮熟スルヲ伺ヒ、之ヲ取出シ冷定セシム、
 酢漬法

新筍ヲ採リ、能ク之ヲ洗滌シテ、籜付ノ儘湯煎シ
 テ之ヲ清水ニ投ジ未ダ冷却セザルノ片、籜ヲ丁
 寧ニ剥キ取ルベシ、剥ギ取り終ラバリ刀ヲ以テ
 之ヲ適宜ニ截斷シ、清水ニ放冷スル凡二時間、之
 ヲ水中ヨリ採揚ゲ、桶ニ移シ、多量ノ食塩ヲ以テ
 漬ケ、上ヨリ重石ヲ置キ、五六日間ヲ經テ、磁製ノ
 鍋ニ入レ、白酢ヲ注ギテ、煮熟スルノ後、硝子罌又
 ハ磁製ノ甕中ニ填メ、煮汁ヲ共ニ注入シテ栓ヲ
 以テ密封シ、松脂ヲ塗抹シテ貯藏ス、但シ罌諾ス
 ルニ當リ、^{テラジ}子、^{トウガラシ}蕃椒ノ二品ヲ共ニ每層混入スル

最モ可ナリ、

乾筍

新筍ヲ採リ籜ヲ剥キ、筍ノ大小ニ從テ之ヲ二割ニシ、又ハ之ヲ四割ニシテ、之ヲ熱湯ニ浸シ、又ハ釜ニ入レ煎沸シテ日ニ曝シテ能ク乾シテ貯ヘ置キ、用ニ臨テ之ヲ水ニ浸シ煎熟シテ食用ニ供ス、支那ニテ之ヲ酸筍ト稱ス、本邦九州地方殊ニ肥筑ニ於テ多ク此法ヲ用ユ、聞ク支那ニテハ蘆筍綠筍ノ二種アリ、大ナルモノヲ綠筍ト云ヒ、小ナルモノヲ蘆筍ト云フ、蘆筍

ハ則蘆ノ筍ヲ以テ製シタルモノニテ其形小ナリ浙江省杭州府上柏縣ヨリ出ヅ、綠筍ハ綠竹ノ筍ヲ以テ製ス、福建福州府ノ近傍ニ産ス、綠竹ハ其葉大ニシテ竹幹殊ニ綠色ヲ帯ビ叢生スルノ莖ノ如ク四時筍ヲ生ズ、幹ノ大サ二三寸ヨリ五六寸或ハ七八寸ノモノアリ、長サ一丈五尺ヨリ二丈以上ニ至ル、福州近傍ノ村落屋後ノ防風ニ多ク此竹ヲ植ユ、土人之ヲ篋竹ト云フ、此竹本邦ニテハ長崎近傍ニ間々栽ル者アリ、相傳フ支那ノ僧道本歸化セシ時携ヘ渡リ初メテ長崎ノ支

那寺、崇福寺ノ山上ニ栽ヘ、其處ニ小庵ヲ結ビ、竹
 林庵ト號ス、故ニ長崎ニテハ此竹ヲ唐竹或ハ竹
 林竹ト稱ス、亦筍ヲ生ズル、夏ハ母竹ノ内ニ生ジ
 冬ハ母竹ノ外ニ生ズ、故ニ俗ニ孝行竹ト呼ブ、筍
 苦味アルヲ以テ普通ノ食用ニ適セズト、

乾筍ノ支那製 乾筍ヲ製スルノ法、蘆筍、綠筍共
 ニ筍ヲ盆又ハ桶ノ内ニ盛リ、上ヨリ開水ヲカケ
 蓋ヲシテ暫ク炮熱シ置キ、能ク炮熱シタルモノ
 ヲ引キ揚ゲ板上ニ並ヘ其上ニ又板ヲ布キ板ノ
 上ニ重石ヲカケ能ク水氣ヲ去リ、竹筍又ハ蘆筍

ニ並ヘ、適宜ノ臺ヲシテ下ヨリ炭火ヲ用テ烘燥
 ス、釜鍋ニテ炮熱シ或ハ風日ニ晒スハ宜シカラ
 ズ、
 食用ニ供スルニハ蘆筍ハ普通ノ筍ノ如ク、開水
 ニ浸シ頭根共ニ用レドモ、綠筍ハ頭ヲ去リ根ノ
 方バカリ食用トス、筍頭ハ硬クシテ食用ニ適セ
 ザレバナリ、故ニ市店ニ購フニ頭根混スルモノ
 ハ其價甚賤シト云フ

塩藏

筍ヲ切り食塩ヲ加ヘテ一沸シ能ク乾シテ壺ニ

入レ置クベシ、八九月ニ至リ取出シ又之ヲ乾ス
ベシ、又法、筍ヲ二ツ割ニシ熱湯ヲ二三回灌キテ
後ニ食塩ニ漬置クベシ、久キヲ經テ變ゼズ、

煙藏

筍ヲ根元ヨリ切り筍ヲ抜キ、米糠ノ細ナルモノ
ヲ填込ミ、切口ヲ紙ヲ以テ張り、三本ヅ、菰ニ包
ミ、常ニ煙氣ノアル竈ノ上ニ釣り置クベシ、色味
久ク變ゼズト云フ、又筍ヲ十數日貯ルニハ、筍ヲ
桶ニ入レ蓋ヲ爲シテ河流ノ急ナル所ニ埋メ置
クベシ、但シ上ニ石ヲ置クヲ可トス、

雪花菜漬

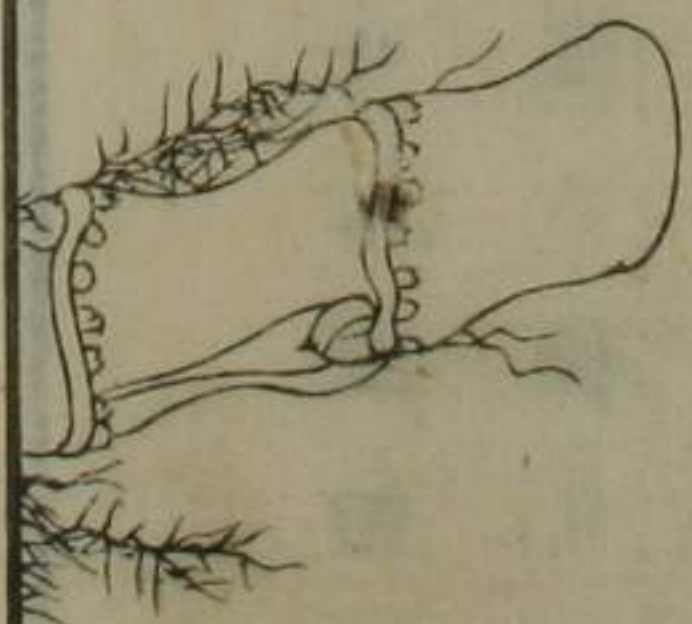
筍ヲ遠方ニ送り、又ハ翌春迄貯ルニハ、二三回熱
湯ヲ灌ギ、又ハ一沸シテ雪花菜ヘ食塩ヲ和シ、桶
又ハ箱中ニ雪花菜ヲ敷キ、筍ヲ併列シ、又雪花菜
ヲ入レ、毎層斯クシテ能ク壓鎮シテ蓋ヲナシテ
其上ヲ密封スベシ、

糖藏

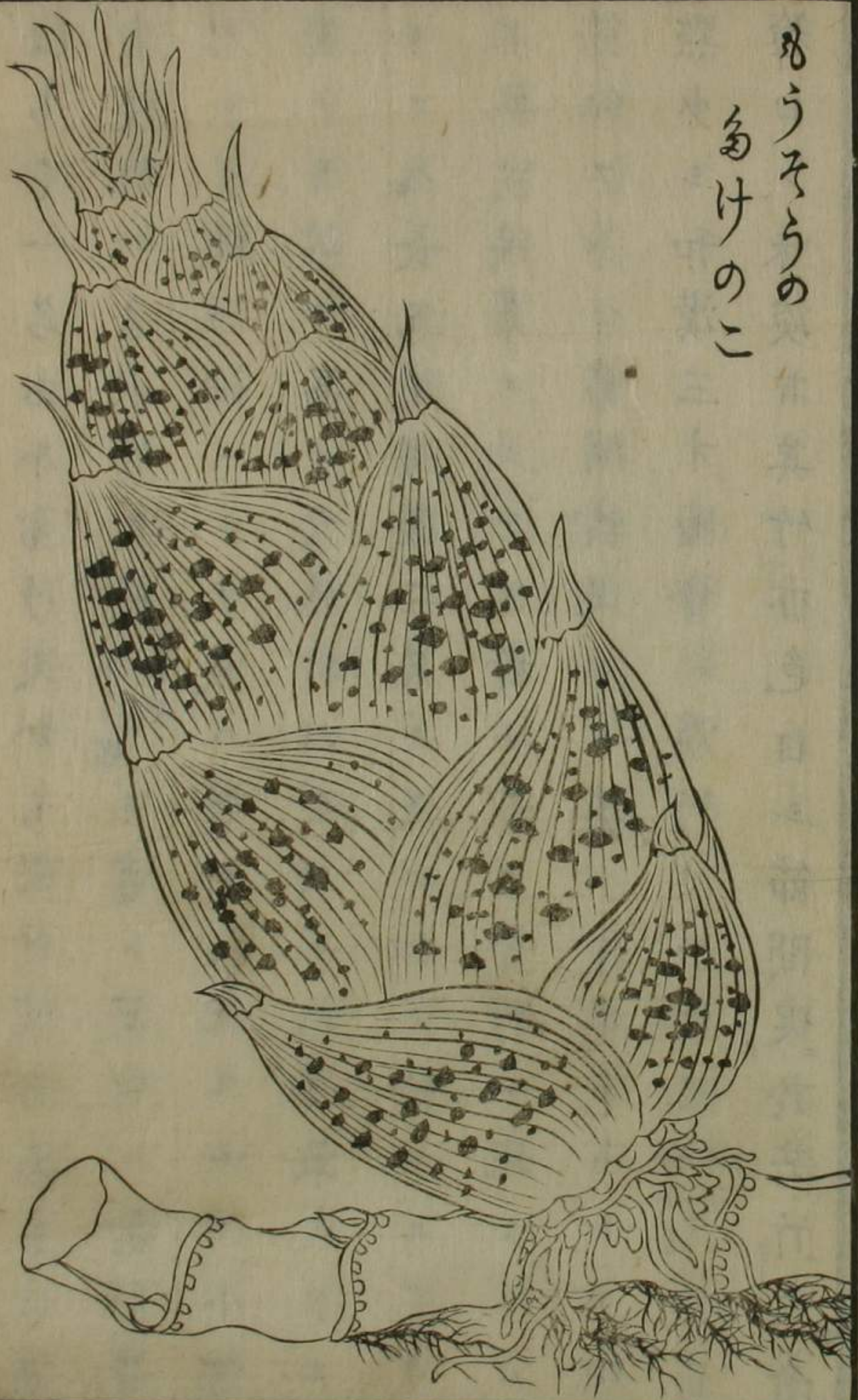
筍ヲ能ク沸煎シ、之ヲ清水ニ浸シ、剥篤亞斯分ヲ
悉ク水中ニ溶解セシメテ後、之ヲ取出シ二三日
之ヲ乾シ、之ヲ適宜ニ切り、砂糖ニ水ヲ適宜ニ入

日本書紀 卷之三十三 三十三

レ能ク之ヲ煎熟シテ後、甕又ハ桶ニ更ニ砂糖ヲ敷キ、糖煎シタル筍ヲ入レ、又砂糖ヲ散布シ、又筍ヲ入レ、又砂糖ヲ散布シ、筍ヲ入レ、斯クシテ器中ニ充ルニ至テ上ニ砂糖ヲ敷キ蓋ヲナシ密封シテ貯フ斯クシテ貯ヘタルモノハ年ヲ經ルニ從テ味愈美ナリ、紀州ニテ之ヲ碧玉糖ト號久



もうそろの
多けのこ



はちく

はちく一名おん分け又からだけ又あわ多け漢
 名淡竹一名水竹又篔和名類ト書ス、淡竹ハ葉形苦
 竹ヨリ較短細ニシテ枝ハ苦竹ニ比スレバ小條
 密ナリ竿ノ高サ大抵三四丈周七八寸最大ナル
 モノハ長五丈周圍二尺ニ及ブモノ稀レニアリ、
 其外皮淺翠ニシテ白粉ヲ着ク苦竹ニ比スレバ、
 節低フシテ節間較促レリ籜ハ淡褐色ニシテ斑
 點少シ和漢三才圖會ニ淡竹ハ白竹也俗云波知久其筍
 籜白シ味淡甘其竹亦色白シ節間促於苦竹大者

四五寸長二三丈此内亦有賀里竹又大和本草ニ淡トハ苦
 カラサルナリト、今諸國多ク植ユ、適地移植肥料、
 保護培養、苦竹ニ異ナルナシ、竹竿ノ効用ハ苦竹
 ニ異ナルナシ、又之ヲ竹細工ニ用ヒ器具ヲ製ス
 ルニ至テハ却テ之ヲ貴重ス駿河細工ニ使用ス
 ルハ皆淡竹ニシテ根子抵モトハ細リ目通ヨリ長大ニ
 レテ節間一尺五六寸ノモノヲ撰用ス駿州阿倍
 郡淺畑沼ノ南側ニ産スル淡竹ニ限ルト云フ、淡
 竹ノ細小ナルモノモ亦ガラ竹ト稱ス、竹杖及ビ
 蝙蝠傘ノ柄トナスモノ多クハ淡竹ノ細小ナル

日本竹譜
卷之六



廿六
真無本

日本竹譜
卷之上

ほちく



真無本

モノヲ使用ス淡竹ノ筍ハ苦竹ヨリ生スル早ク
 シテ四五月頃筍ヲ生シ、籜上細線ナル紫紋理及
 ビ細毛アリテ斑點ナシ此筍味甘淡ニシテ苦味
 ナシ

めふけ 附螺節竹 神竹

めふけ一名女子竹、又長節間竹、又名湯竹、又三河
 竹、筆管竹、秋竹、又ハタケト稱ス大和本草ニ皮
 久クシテ脱チズ、故ニ皮竹ト云フ、又ニガ竹ト稱
 ス、大和本草ニ筍ノ味苦クシテ吳竹ニ甚劣アリ
 苦竹ト混ズベカラス、細小ナルモノヲ篠竹又シ

又竹、又細竹、漢名筱ト云フ近來會朶竹ト書スル
 アリ、竹幹ノ長大ナルモノヲ、たゝの、又たはの
 の、漢名箨竹ト稱ス、周リ三四寸長三四間直長ニ
 シテ節間長キモノ二尺餘ニ達ス、初生ノ新竿白
 粉ヲ附ス、籜ハ年ヲ經テ脱セズ、葉ハ厚クシテ濶
 シ、此竹ハ山中又ハ原野ニ自生シ、河堤等ニモ能
 ク生ズ、鞭根アリ能ク蕃衍ス、農家邸宅ノ西北ニ
 植レバ能ク密生シテ風日ヲ防クノ功アリ、此竹
 人家必須ノ一タリ、釣瓶竿トナシ、藩籬トナス、又
 夫玉珧西施舌等ヲ捕獲スル者此竿ノ最長ナル

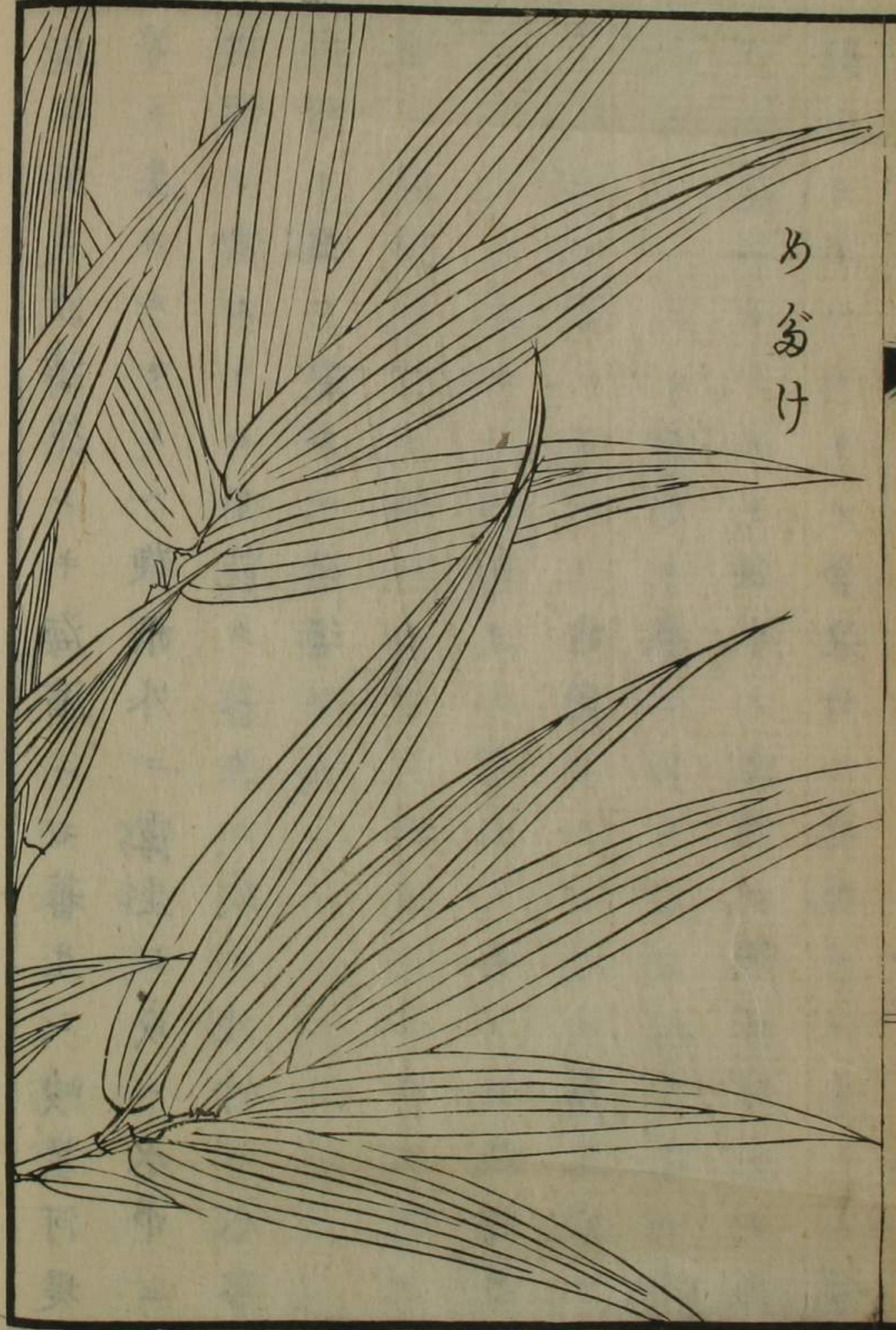
モノヲ擇ビ、晚秋ノ候之ヲ伐リ、寒中煙氣アル所ニ貯ヘ、初春ノ時之ヲ焙リ撓メテ竿末ニ鐵鈎ヲ附シ、之ヲ持シテ海底ヲ撈探シ、玉珧及ビ西施舌其他介螺類ヲ突テ之ヲ捕獲ス、又六七尺ニ切り、之ヲ以テ編テ箐ヲ作り海中ニ浮ベテ、鯛及ビ鱸鰾ノ類ヲ養フ、之ヲ活箐ト云フ、含朶竹ハ安房、二次、駿河、伊豆、下野、武藏、産出最モ多シ、相模常陸之ニ次ク、含朶竹ノ斑紋アルモノハ肥後八代郡ニ産ス此竹苦竹淡竹ニ比スレバ較寒ニ耐ユ、此竹ハ栽培最モ容易ニシテ土石相均シキ砂磧ニモ

能ク生ジ、波濤烈シキ海濱ニモ蕃生シ、峻崖河堤等ニ生スルモノハ鞭根外ニ露生シ、或ハ水中ニ鞭根ヲ垂ル、モ亦能ク蕃生ス、故ニ此竹ハ水害豫防ノ捷ヲ造ルニ必須トス、捷ノ造法ハ、竹ヲ植ヘテ水ノ决流スル口ヲ塞グモノナリ、大河ノ兩岸、又ハ出水ノ患アル堤塘等ノ水涯ニ植ヘテ、竹ノ密接スルニ及テ、藁草或ハ樹皮等ヲ以テ其内ヲ塞ギ、又土石ヲ以テ之ヲ填メテ造ルモノナリ、洪水ノ溢流汎濫ヲ防クニ此捷ナカルベカラズ、含朶竹ハ筍味甚ダ苦ク又硬

日本竹譜 卷之上 眞無樓藏版



りふけ



クシテ食フベカラズ、含朶竹ノ小ナルモノハ周
 一二寸、長六七尺、民家編テ天井トナシ、又壁骨ト
 ナシ、鬘扇ノ骨トナシ、籠籃ノ類トナシ、笠骨トナ
 ス、其他民家ノ用極メテ多シ、

螺節竹

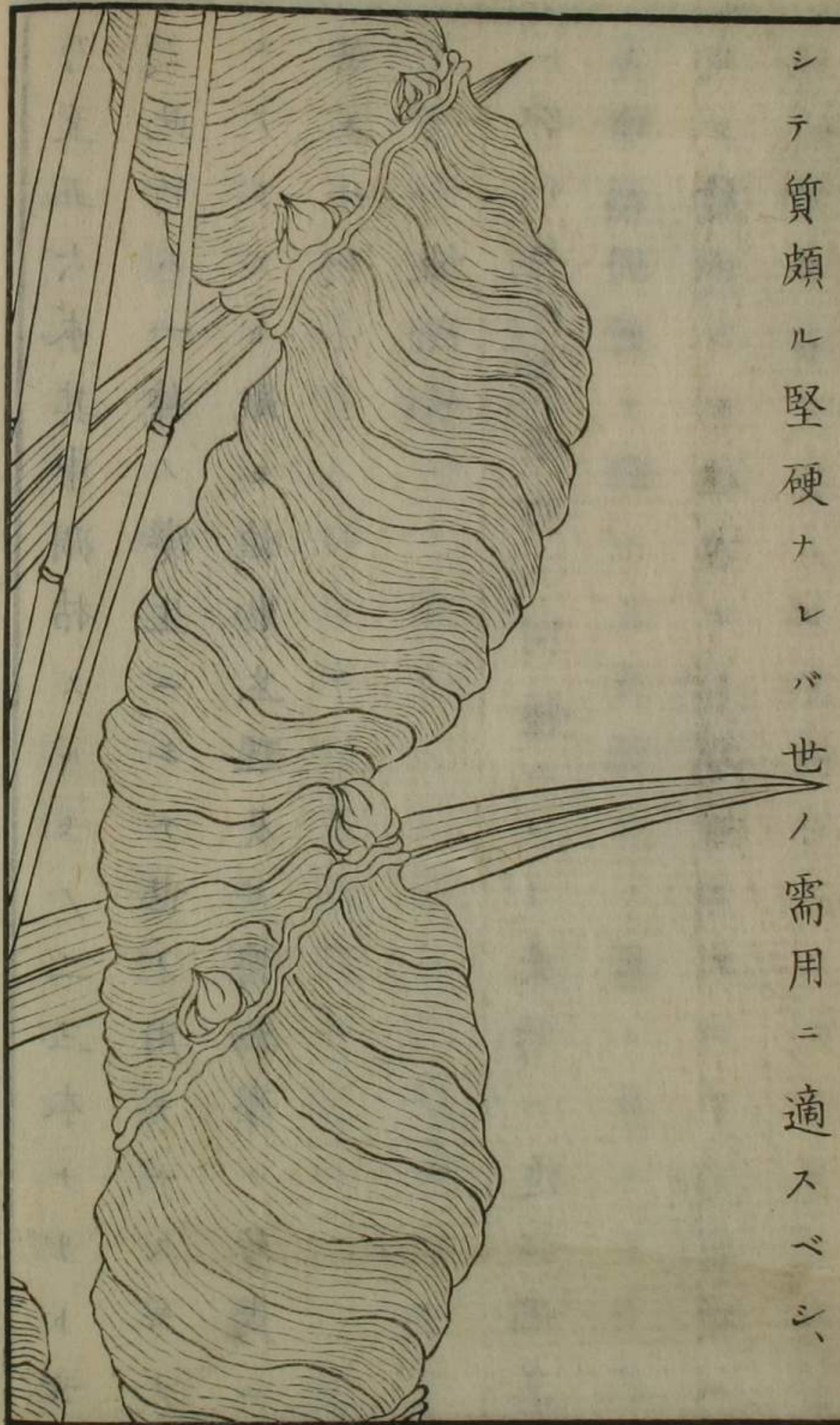
螺節竹ハ含朶竹ノ變生セシ者シテ薩摩國給黎
 郡永里村字市ノ坪市坪權右衛門所有地内ニ産
 スル竹ニシテ三尺六七寸ノ間、螺状ヲナシ梢ニ
 至テ一幹ヲ生シ梢節一所ニ數枝ヲ叢生シ甚奇
 ナリ、此竹年々變生シテ螺状ヲナスモノ四五本

乃至五六本其中凋枯スルモノ二三本ナリト云
 フ、此竹ハ一種ノ變生ニシテ世ノ用ヲナスモノ
 ニアラズト雖モ、植物生理及ビ博物學ノ參考ニ
 供スベシ、

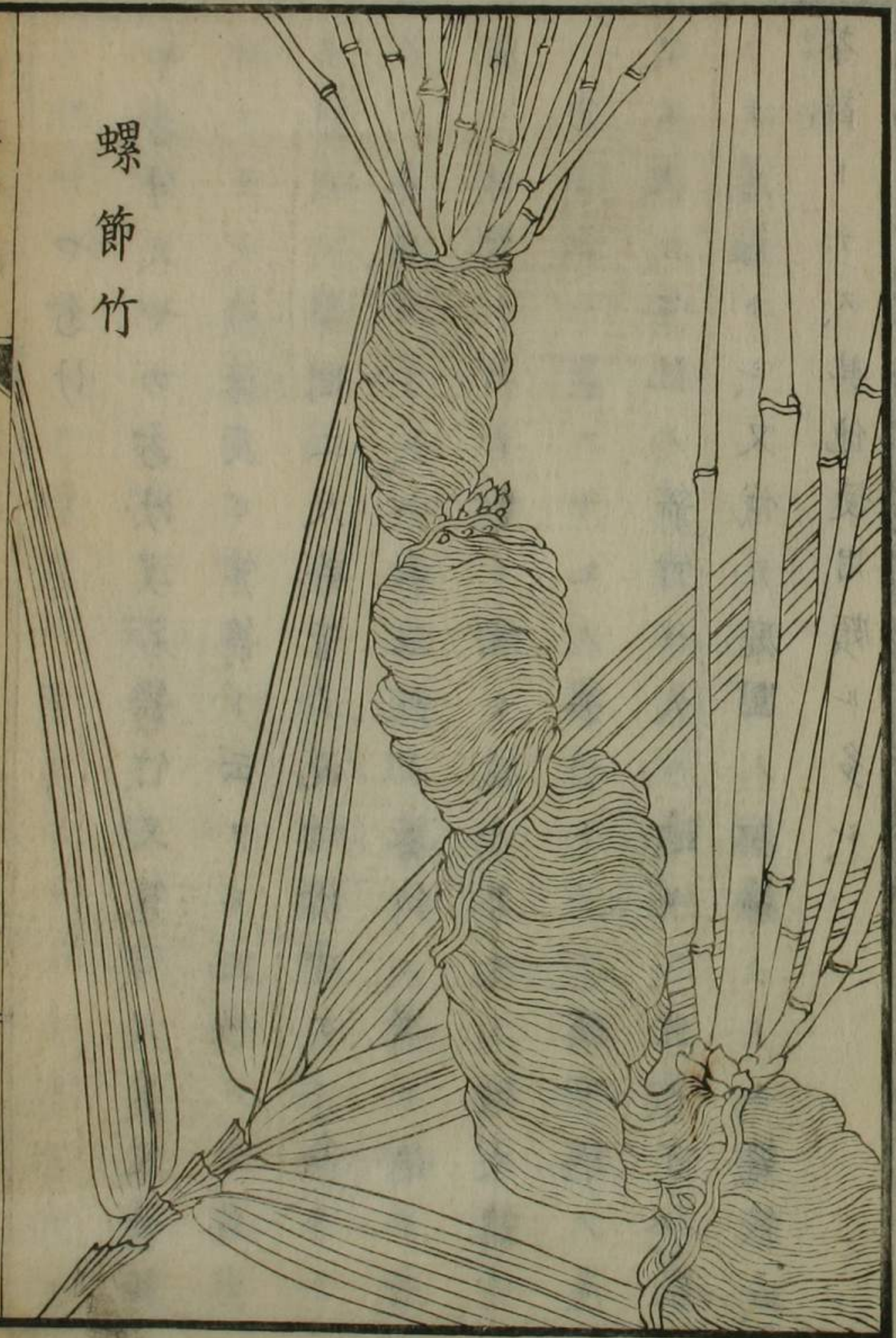
神代竹

一神代竹ハ含朶竹ノ同種ニシテ、此竹ハ近江國高
 島郡福岡村ヲ距ル三里許上ヶ嶽ニ産スル自然
 生ノ竹ニシテ往古ヨリ苜採リタルトナシ故ニ
 神代竹ト名ク、去ナガラ枯竹ノアルヲ見ズ其質
 堅韌ニシテ目今筆管等ニ製シ漸次販路ヲ開カ

シトスル景況アリ其竹ヲ見ルニ一種ノ奇竹ニシテ質頗ル堅硬ナレバ世ノ需用ニ適スベシ



螺節竹

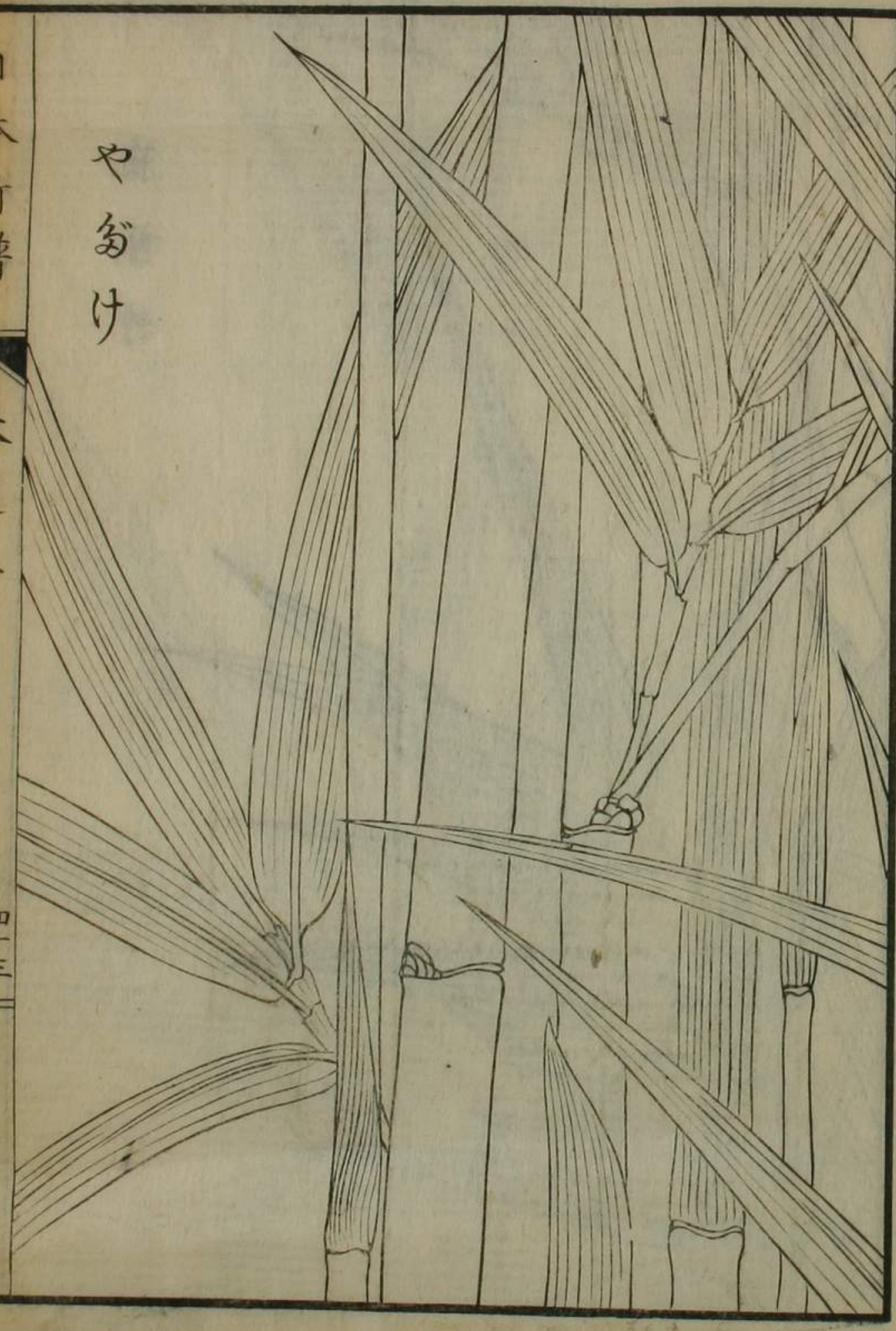


やぶけ

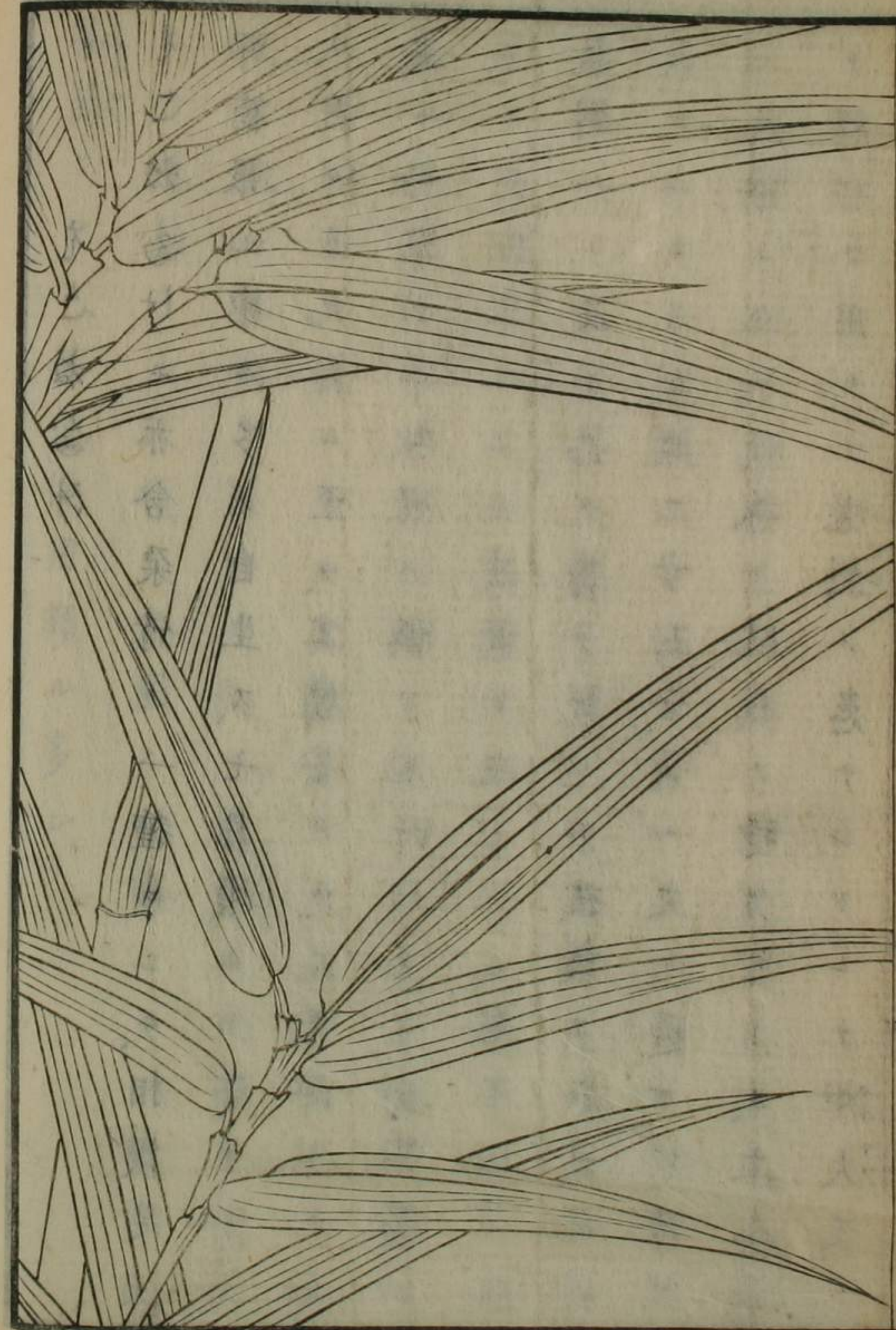
やぶけ又やのぶけ漢名箭竹、又篋竹、又笑、又箭幹竹ト云フ、箇籐及ビ筭箭ト云フモ此竹ノ古名ナリ、節低ク、節間二尺許、昔シ此竹、備中矢ノ島ヨリ多ク産出セリト、今各地能ク蕃衍ス、箭ヲ造ル者、必ス此竹ヲ以テ削リ焙リ撓ノテ之ヲ制ス、箭竹ハ常陸國ニ産スルモノ第一トシ、上総下総ノ産之ニ次ク、其他ノ箭竹ハ矢ニ適セズ、此竹、方今、植ヘテ藩籬トシ、又伐テ庭園ノ短籬トナス、籠箆或茶篩チハアレヒトナス、其他使用頗ル多シ、

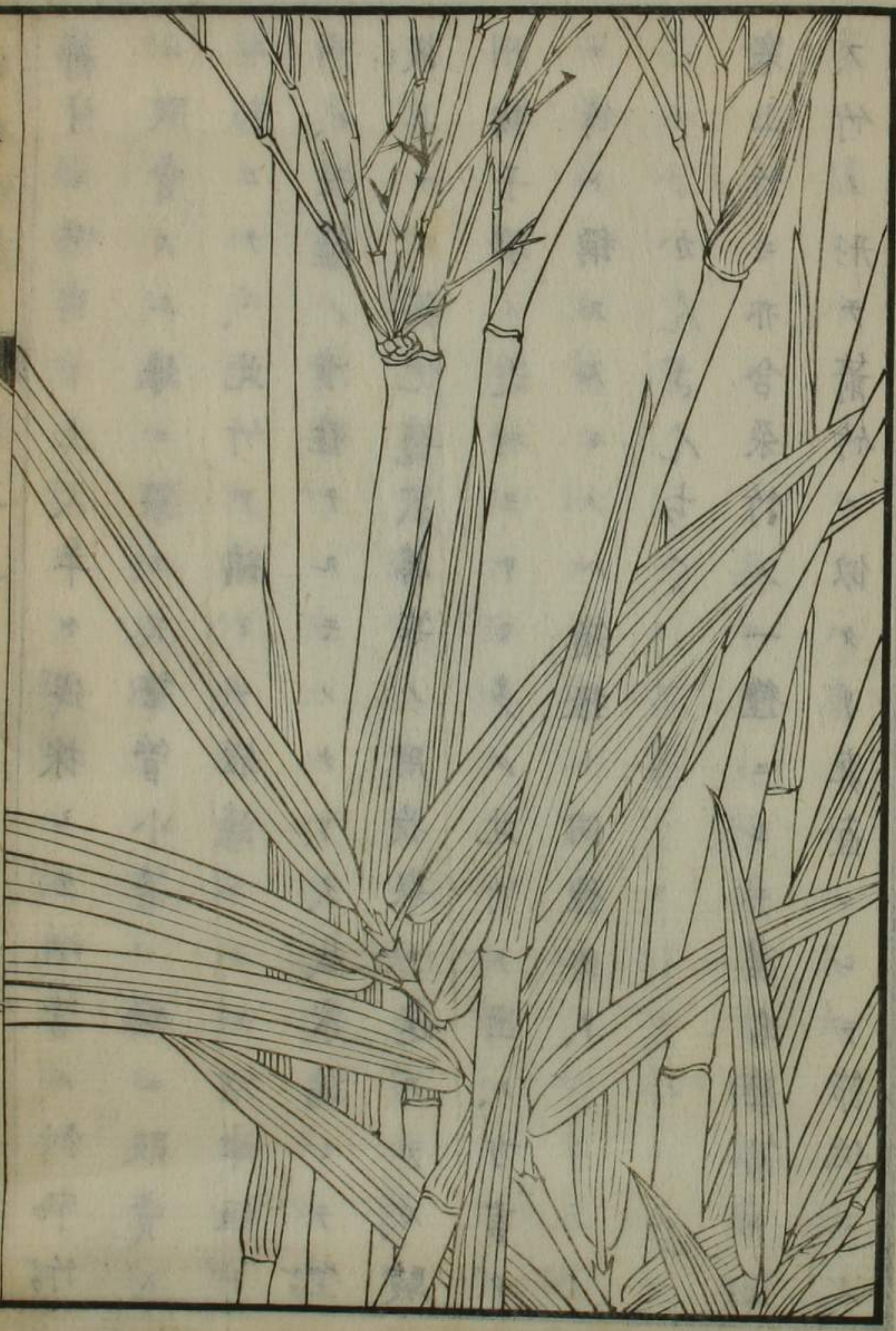
えこねぶけ

えこねぶけモ亦含朶竹ノ一種ニシテ、相摸足柄郡箱根山中ニ多ク自生ス、七月頃ヨリ筍ヲ生シ、八月ヨリ九月ニ至テ、其筍長サ凡九尺許トナル、是レ含朶竹ニ秋竹ノ稱アル所以ナリ、全竿籜ヲ被リ、只梢末二三ノ枝葉ヲ現スノミ、翌年四月暖氣到ルニ及テ、悉ク籜ヲ脱シテ枝葉ヲ發ス、此竹大ナルモノモ、周二寸五分、長一丈ニ過ギズ、節間一尺餘ニ止ル、伐採ハ晩秋ノ時ヲ可トス、土人ノヲ燃料ニ用ヒテ爆烈ハルゼルノ患ナシトシテ炬火及ビ



やぶけ





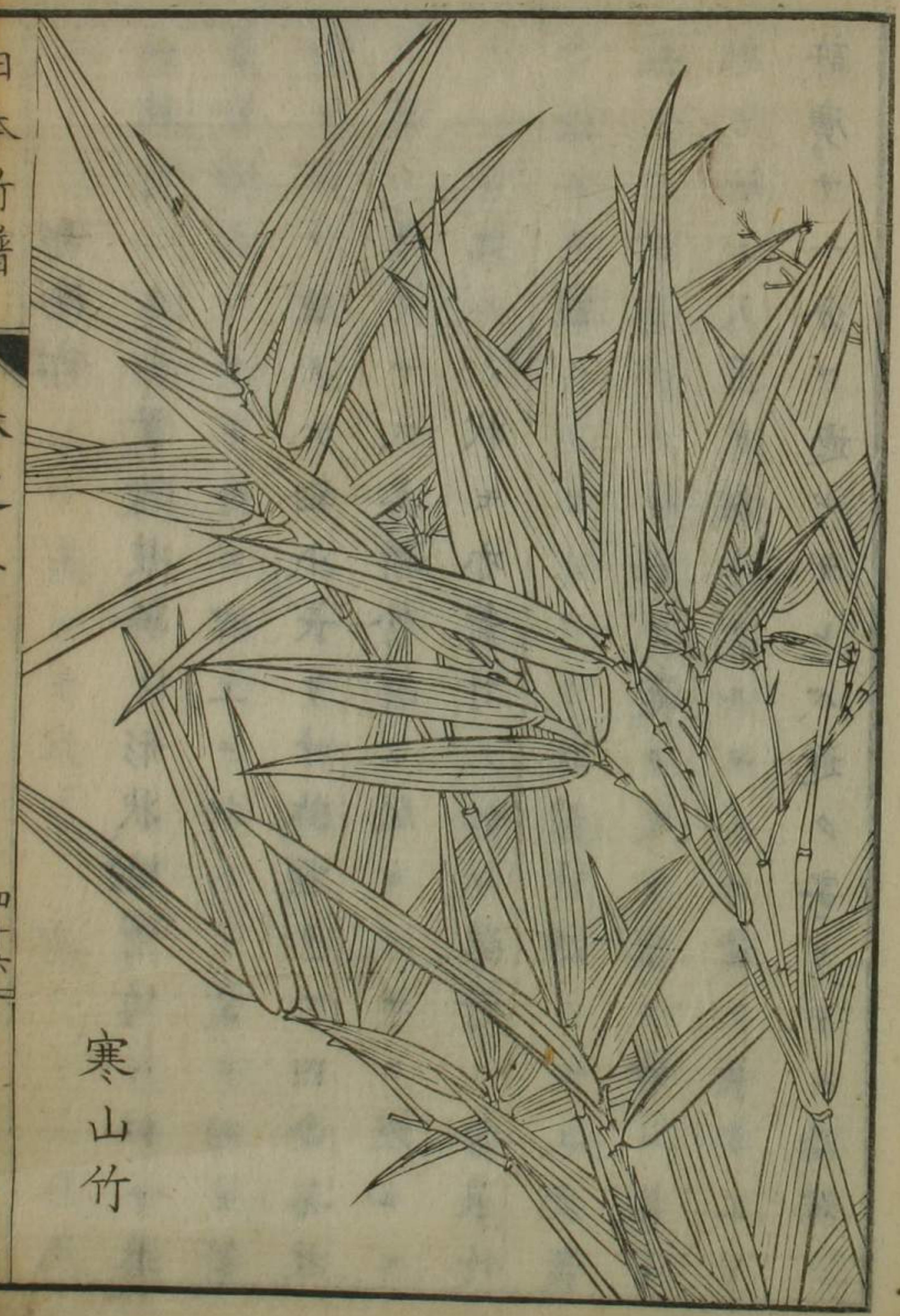
箱根竹



薪材ニ供用ス、土人年々伐採シテ烟管ノ刺字竹
 = 販賣スル殊ニ夥シ、又筆管小箸ノ類ニ販賣ス
 ル歎カラズ、此竹ヲ編ミテ短籬トナス、沼津垣ト
 稱ス、短籬ノ清雅ナルモノナリ、又民家編ミテ壁
 板トナス其他籠笊箒等ノ用、枚舉ニ遑アラズ、駿
 州鞠子驛ノ近村ヨリモ多ク此竹ヲ出ス、方言ク
 ヲ竹ト稱スルモノハ箱根ト同種ナリ、
 かんざんちく
 寒山竹モ亦含朶竹ノ一種ニシテ漢名篔簹ト云
 フ、竹ノ形ヲ箭竹ニ似タリ真直ニシテ節低シ人

家ニ植ル小ナルモノハ高サ七八尺大サ小指ノ
 如シ、大ナルモノハ高サ二丈餘、圍三寸許、每節相
 去ル七八寸、葉ノ形チモ亦箭竹ニ似テ小ニシテ
 四葉或ハ五葉ヲ以テ一朶トナシ、枝ハ初年三枝
 ナレドモ二年ニシテ五枝ヲナシ、三年ニシテ九
 枝或ハ十枝ヲナス、此竹、枝葉梢ニ至テ多ク密生
 ス、又尋常ノ含朶竹ニ比スレバ、枝長クシテ茂シ、
 箒トナシテ可ナリ、此竹適地ニ生ズルモノハ、竿
 肥大ニシテ高サ七八丈以上ニ達スルモノアリ、
 故ニ掃雲箒竹ノ名アリ、諛竹モ植土少シクアル

地ニハ蕃茂ス、栽植セバ美觀ニシテ亦便益甚カ
ラズ、今人家庭園ノ裝飾ニ植ヘテ愛玩スルニ過
ギズ、



寒山竹

通絲竹一名仰葉竹、枝幹ノ形狀、略箭竹ニ似テ其
 葉皆仰出シテ下垂セズ上ニ向ヘリ、葉ノ形モ箭
 竹ニ似テ極メテ細小、長サ寸許、濶サ三四分、每枝
 五葉一朶ヲナス、其新幹籜ヲ脱セズ、年ヲ經ルモ
 ノハ皆落ルノ状モ亦箭竹ノ如シ、該竹ハ含朶竹
 中最モ美觀ナルモノナリ、桂園竹譜ニ云フ、此葉
 極メテ細長ナルヲ以テ、遠ク之ヲ望ム時ハ恰モ
 絲ノ如シ、又至テ細小ナルモノハ葉ノ長サ二寸
 許、廣サ一分ニ過ギザレバ、近ク寄リテモ尚絲ノ

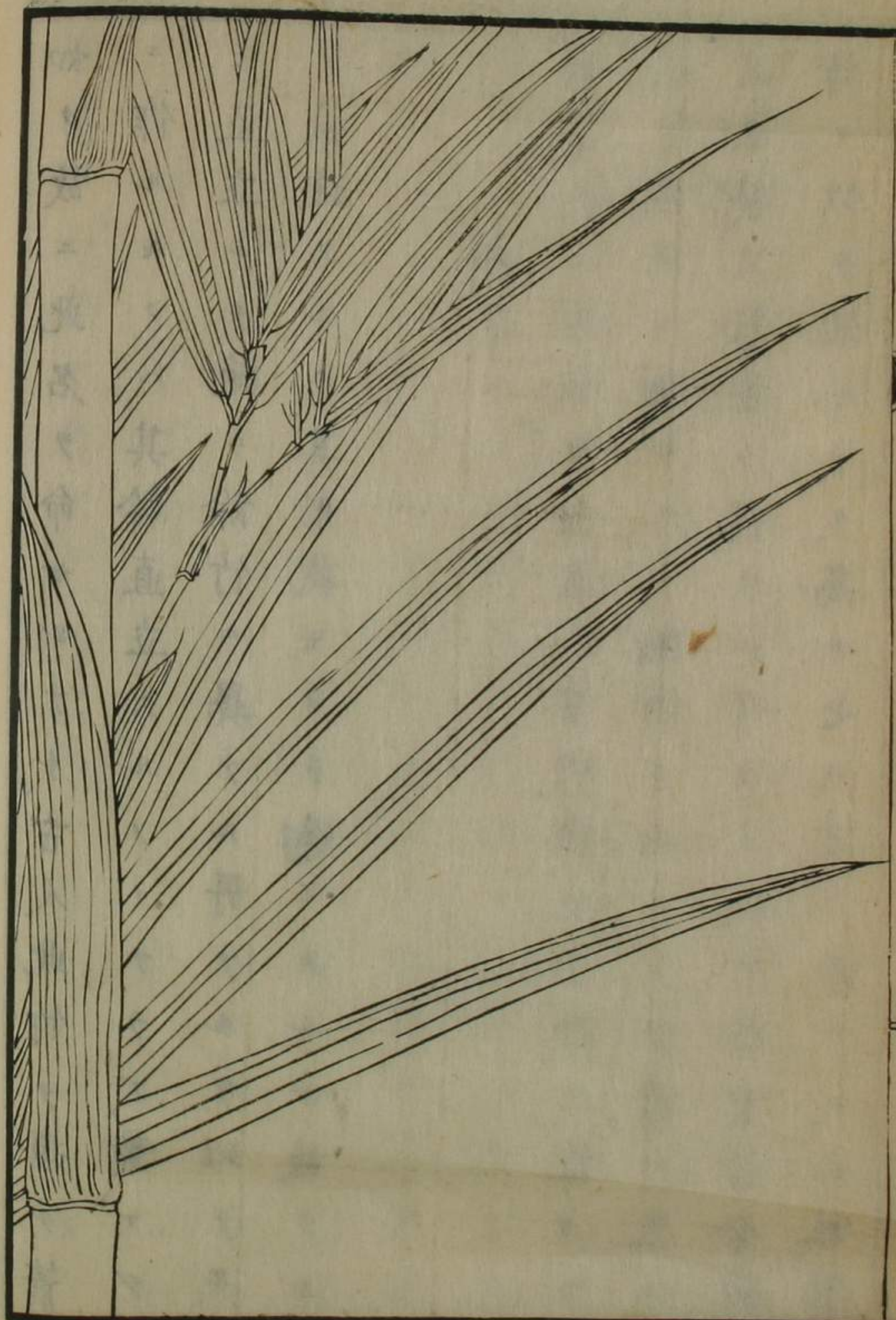
如ク故ニ此名ヲ命ゼシナリ、古人此竹ヲ撰ゲ箭
 ニ作ルモノハ、其幹直立スルノミナラズ、葉マデ
 モ直立シテ絶テ餘竹ニ異ナル所アルヲ以テ矢
 ノ直達スルニ其形狀モヨク適ヒタルガ故ナル
 ベシ

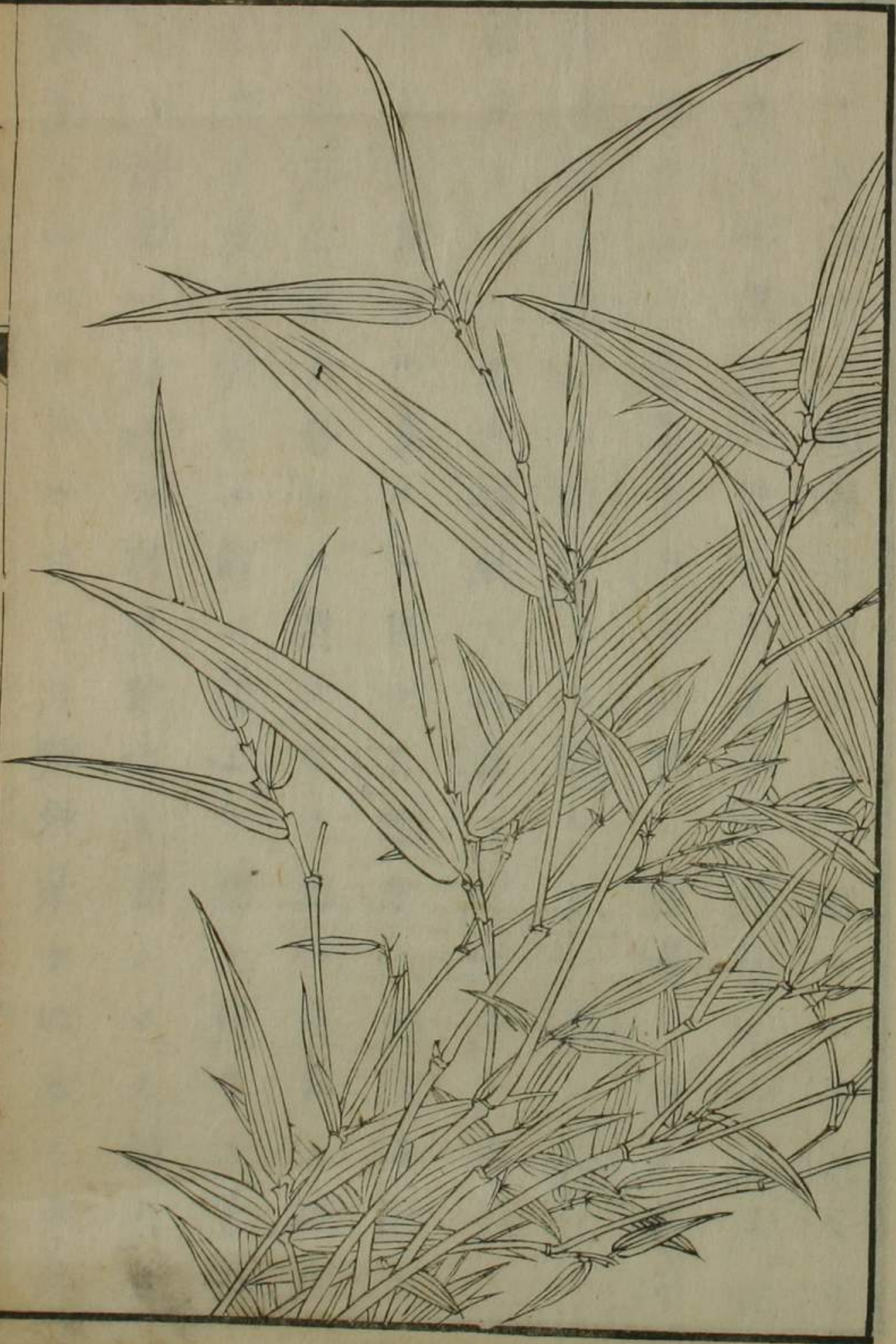
ねざ

ねざ、一名飯筥、漢名千里竹、俗ニ小竹ヲ佐々ト
 云フ、佐々ハ細々ナリ、細竹ヲ云フト古書ニ見ユ
 又米筥、又萎筥ト稱スル所アリ、此竹幹葉皆含朶
 竹ニ似テ短小ナリ、高サ七八寸ニ過キズ、山林原



通絲竹





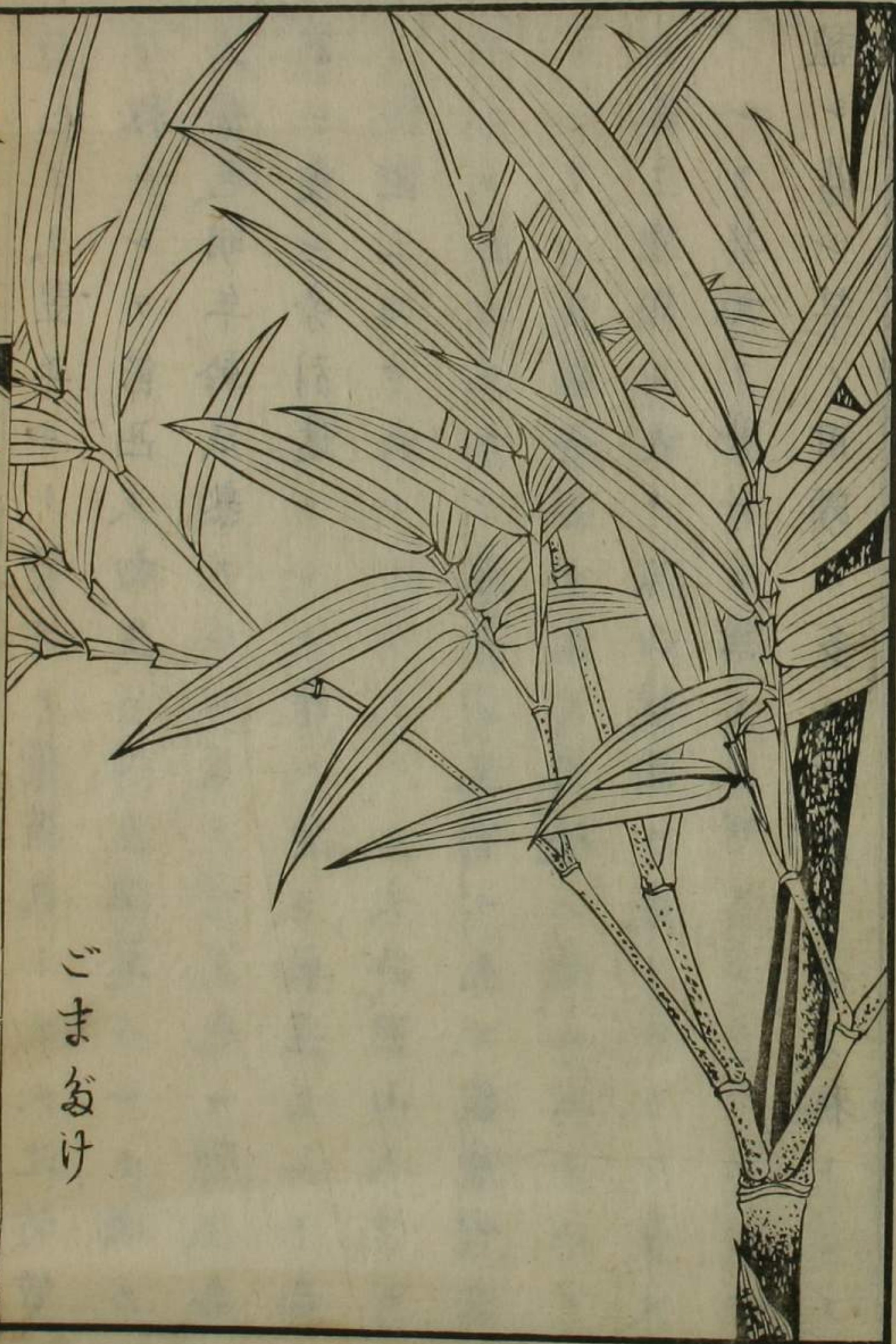
ねざ

野處トシテアラザルナシ、鞭根最モ四方ニ延長
 シテ園圃ノ植物ヲ防ゲ、植物ヲ害スルヲ以テ之
 ラ燒キ、之ヲ苻ルモ、隨テ苻レバ隨テ新芽ヲ叢生
 シ、民家芟除ニ苦シム、然レドモ此竹利用モ亦大
 ナリ、民家屋ヲ葺クニ用ヒ、又鞭根ハ能ク土塊ヲ
 凝結スルヲ以テ斜地ノ土崩ヲ防キ、及ビ川河ノ
 堤防等ニ植ヘテ功ヲナス歟カラズ、故ニ炮臺ヲ
 築キ、洪水ノ溢流ヲ防ク堤塘ヲ新築スルモノ茅
 芒^{スギ}及ビ千里竹ヲ植ヘテ土砂ノ崩解ヲ防グニ必
 須トス、此竹ノ邇^ヒ蔓ヲ防ガント欲セバ、馬^サ藻^モヲ多

ク採收シテ、之ヲ田畑ノ周圍ニ埋メテ之ヲ防グ
 ヲ可トス、相州楠ヶ浦ノ農夫ノ言ヲ聞クニ馬藻
 ヲ採テ小竹千里竹ノ叢生スル圃邊ニ埋メ置ケ
 ハ小竹ノ叢生シ來ルヲナシト云ヘリ、

おま多け

おま多けハ漢名紫竹、又紫君、又紫苔、又觀音竹、桂
 園竹譜ニ俗稱^ス胡麻竹、此竹紫黒斑點極メテ細小
 ニシテ頗ル胡麻ノ如シ、故ニ名クト、又黒竹ト稱
 スル所アリ、竹ノ形状苦竹ニ異ナラズ、本草綱目
 啓蒙云紫竹ハ即苦竹ノ品類ナリ、生ジタル年ハ



こまふけ



こまふけ

緑色ナリ、翌年ヨリ變ジテ紫黒色トナル、此竹質堅韌ニシテ節凸久、初生ハ外皮深翠ニシテ漸ク淡紫色、明年幹成熟スルニ及テ紫黒色ニ變ズ、各地ニ産シ旁引速ニシテ遠ニ達ス、幹直上シテ高丈許、圍三四寸大ナルモノハ二丈許圍七八寸ナルアリ、籜斑文アリ、復至前後筍ヲ生ズ、枝葉繁密ナラズ、山麓、原野共ニ生ズ、温暖ノ地ニ在ルモノハ其生殖頗ル速ナリ、山城國ニ産スルモノ長大ニシテ其地ヲ紫竹ト稱スル所アリト云フ、此竹移植シ易シ竿ノ用頗ル多シ、杖及ビ傘ノ柄トナス

モノ最モ許多ナリトス、其他檐簾トナシ藩籬トナシ、又小齋茶室ノ竹椽、天井ノ棹縁及ビ浴室ノ壁板トナシ、凡ベテ縦羽目ノ目板ニ用ヒテ最モ雅致アリ、此竹地ニ入ル深カラズ栽植、培養最モ容易ナリトス、嘗テ紫竹三竿ヲ庭中ニ移植ス、三年ニシテ七八竿ニ至ル、之ノ二友ニ分與ハ一友之ヲ甕中ニ植ヘ水ヲ盛ル尚能ク蕃茂ス、又一友ノ登盆セシモノ竿ニ黄緑筋ヲ生ズ、今之ヲ奇重ス、紫竹ノ沃土ニ生ズルモノハ周五六寸長一丈八九尺ニ至レドモ、却テ瘠地ニ産シテ細小ナル

ヲ需用多シトス、武州足立郡戸田川ノ南岸ニ沿
 フタル、下内間村ト云フ所ハ、硤礫交雜シテ土地
 瘠薄、他ノ穀菜ヲ造ル能ハス、然レドモ、紫竹林七
 反歩ヲ所有スル者、杖又ハ傘ノ柄ニ伐テ販賣ス
 ル年々平均金五百圓ニ下ラズト云フ、此地瘠薄
 ナリ故ニ紫竹短細ニシテ却テ都府ノ需用ニ適
 ス、且此紫竹林ハ肥料及ビ栽培ヲ要セシ事ナク、
 年々伐採スルノミナリト云フ、花鏡云、紫竹、出
 海、普陀山、其幹細而色深紫、段之、可爲簫管、本邦ノ
 俗亦伐テ笛トナシ、又兒童ノ玩具トシテ販賣ス

ル夥シ、

かんちく

附茂草竹

本草一家言云有^多雪竹^{ユルテ}和名寒竹、又名孟宗竹、冬時
 抽筍、桂園竹譜ニ云フ、凡竹類多シト雖、此竹ヨ
 リ短枝密節繁葉ナルハナシ、又本幹細小ナル故
 フ以テ其梢末ニ至テハ枝葉下垂スルヲ業平竹
 ノ如シ、大和本草ニ寒竹ハ冬筍ヲ生ズトイヘド
 モ今江戸ニアルモノハ此筍秋ヨリ生シテ冬ニ
 至レバ、生長母竹ヨリ高シ蓋シ風土ノ異ナルニ
 由ルナルベシ、其筍ノ状すバ竹ヨリ細小ナリト



雖毛味甘美殊ニ食フニ堪ヘタリ、

かんちく

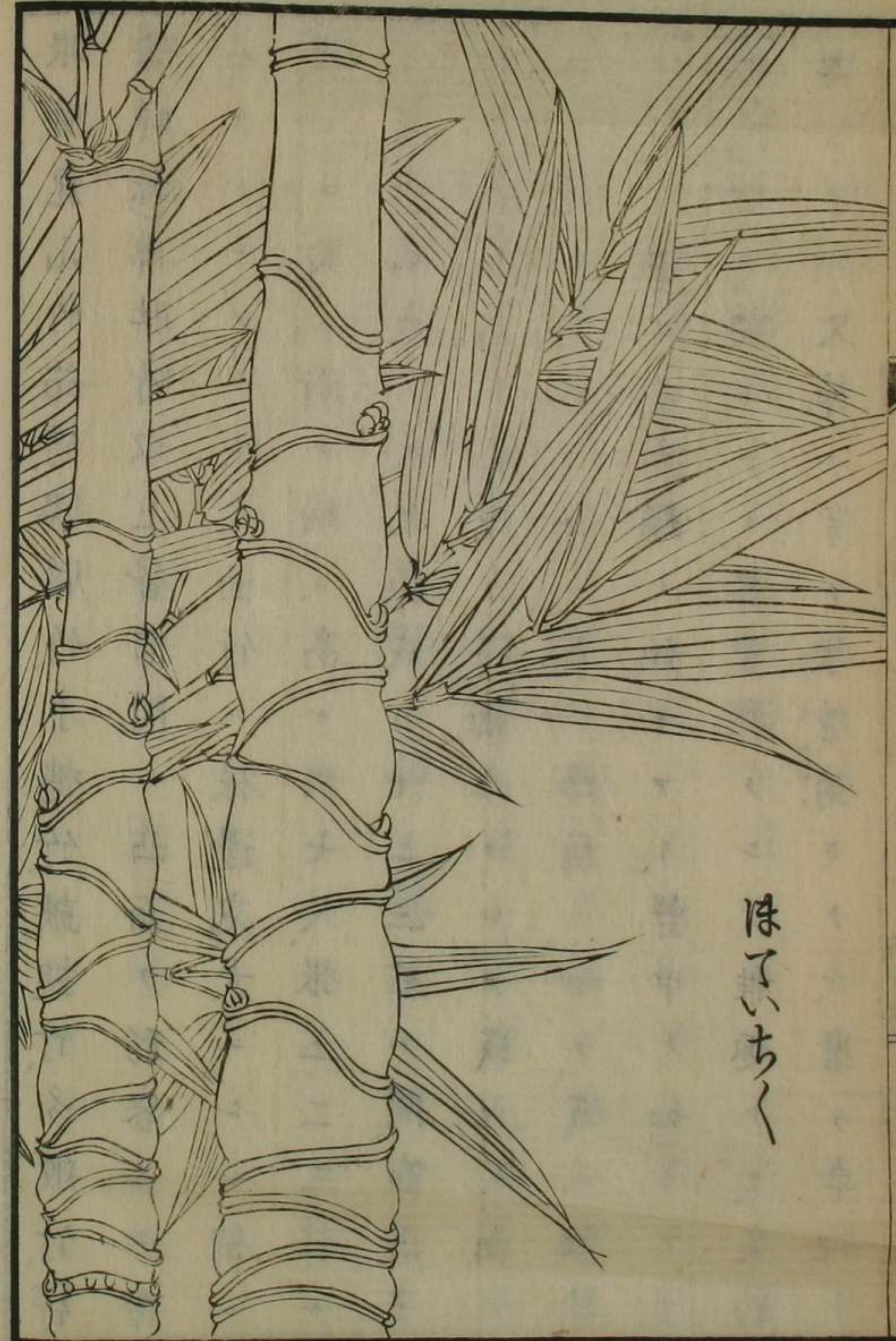
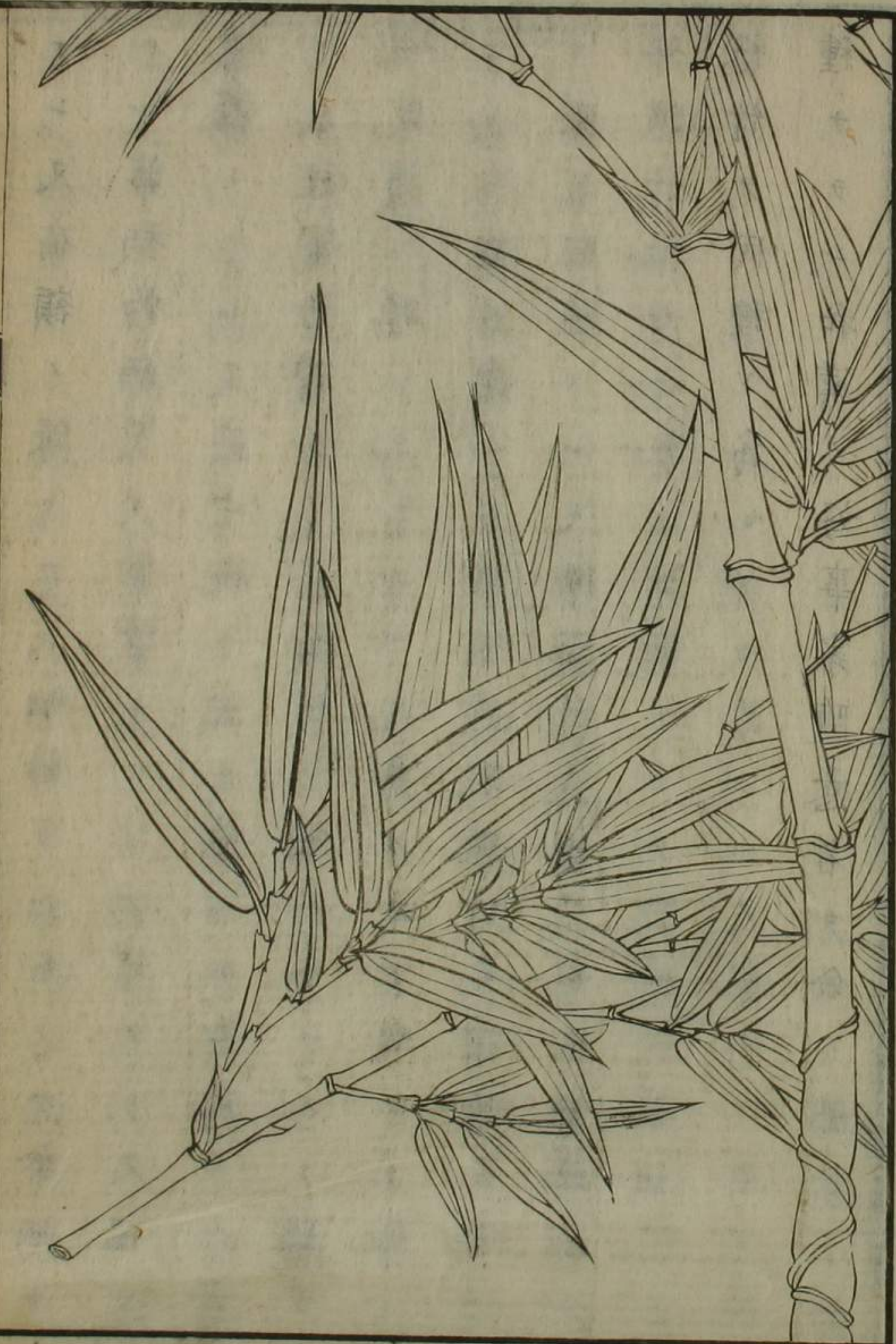


寒竹ハ葉ノ形苦竹ニ似テ細小ニシテ薄シ竹幹細ク節凸ク節間短ク肉厚ク最長ナルモノモ八九尺ニ過ギス籜脱スレバ淡紫色毎節上細瘤状ヲ繞生ス恰モ鬚根ヲ出サントスルヲ視スモノハ状ニ似タリ其性能ク密生シテ旁引遠カラズ人家多ク植ヘテ藩籬トナス此竹濕地ニモ亦高燥ノ地ニモ能ク蕃茂ス大和本草ニ寒竹ノ筍ハ色黒クシテ細シ此竹冬月筍ヲ生ズ故ニ寒竹ノ名アリ夏ニ至テ始テ枝葉ヲ發ス其籜斑點アリ久シテ脱セズ寒竹ハ細竿多節其質柔靱ニシテ

籃籠ノ類ヲ製スルニ宜ク其大ナルモノハ鞭トナシ又筆管トナス此竹モ亦漢名紫竹ト云フ紫竹ト混ズベカラズ寒竹ノ根ハ鞭トナシテ甚貴重ノモノナリ往時ハ將軍家ノ外用ユル能ハガリシト云ヘリ最モ鞭ハ密節ナルモノヲ貴シトス小野ノ高秤ト稱シ左手ヲ伸バシ右ノ乳頭ヨリ左手ノ中指末ニ達スルヲ長サノ法トシ其内柄ヲ六寸トシ其餘三十三節アルモノヲ免許鞭ト稱シ乘馬家ノ貴重スル所ナレドモ三十三節アル鞭ハ甚稀レナ

リト云フ、
 寒竹ノ同種、日向國、那珂那、上島田村ニ産シ、方言
 茂草竹ト稱スル竹アリ、九十月ノ頃、筍ヲ生ジ、其
 生長ノ速ナル他竹ノ及フ所ニアラズ、筍ハ食シ
 テ味甘美、竿ハ織機オリダラシ及ビ絲ヲ卷クニ用ヒ、又室内
 ノ天窓板ラシ又書齋ノ窓格子等ヲ編ミテ頗ル雅ナ
 リ、
 ほていちく
 ほていちく漢名人面竹、俗ニ布袋竹ト云ス、此竹
 異名多シ、琉球竹、天和本草、薑竹、鬼面竹、佛面竹、佛

眼竹、虎山竹、筍竹、鶴膝竹、木槌竹、鼓槌竹、多般竹、竹
 譜詳録、佛肚竹、以上皆節間ノ凸面ヲ形容シテ命
 名セシモノナリ、人面竹ハ根邊宛大ニシテ梢ニ
 至ルニ及テ漸ク細ク、高ハ六七尺、根上二三節ヨ
 リ五六節或ハ八九節、或ハ十二三節ノ間、節促リ
 四面參差、或ハ正、或ハ斜、面凸クシテ或ハ人面ノ
 如ク、或ハ鬼面ノ如ク、或ハ佛面ノ如ク、或ハ鶴膝
 ノ如ク、籜モ亦魚鱗ノ如キアリ、蟹甲ノ如キアリ、
 邦人伐テ杖トナス、其質輕クシテ雅趣アリ、又釣
 竿トナシ、又節ヲ穿テ煙管筒トナシ、磨テ卓脚ト



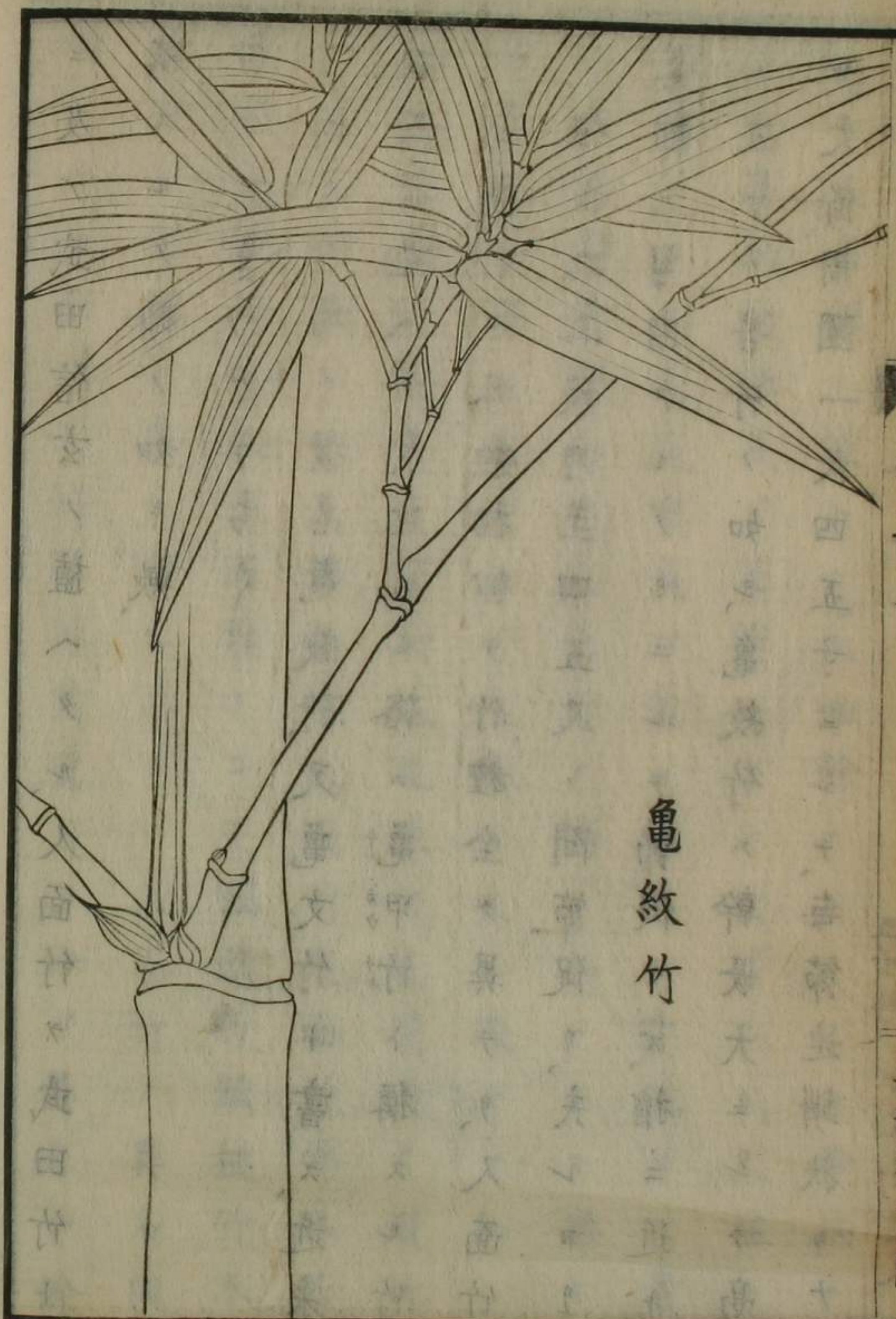
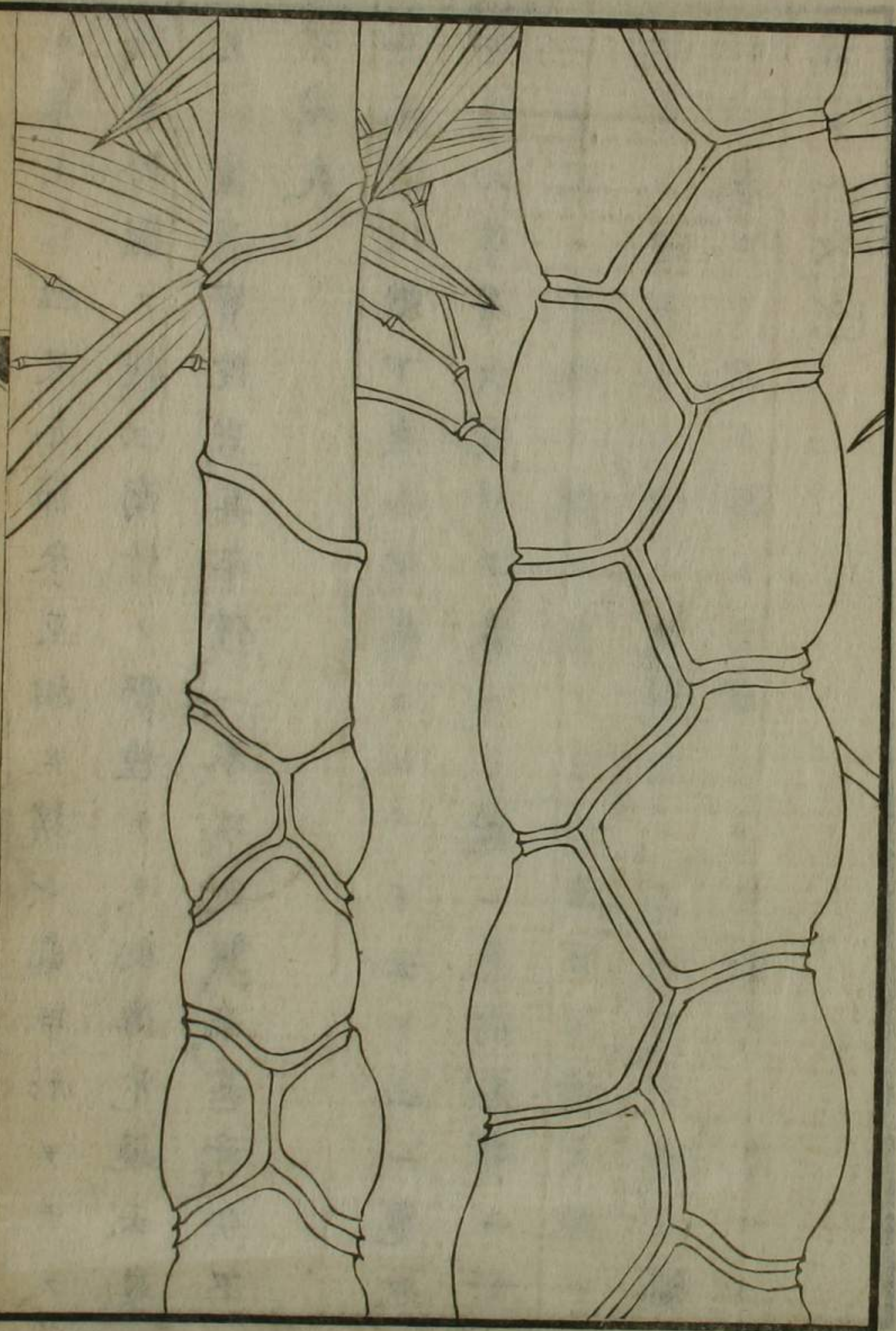
味了いちく

ナシ、又扁額ノ縁トナシ、細幹ナルモノハ傘柄ト
 ナシ、箒柄、杓柄及ビ筆管トナシテ可ナリ、又植テ
 藩籬トナシ、又庭中、或ハ盆ニ植ヘテ愛玩スル者
 アリ、桂園竹譜云フ、人面竹ノ筍ハ小ナリト雖モ、
 味衆筍ニ勝レリ、サレド人多ク之ヲ啖フヲ知ラ
 ズト、桂園竹譜ニハ布袋竹、琉球竹、虎攢竹、多般竹
 ヲ異名同種トシ、又佛面竹、人面竹、鬼面竹、佛肚竹、
 佛眼竹、拉^チ母^ナ七^ナ扱^ナヲ同種トシ、又鶴膝竹、鼓槌竹、木
 穂竹ヲ同種ト爲セドモ、恐クハ人面竹ノ異名同
 種ナラン、和漢ノ好事家、隨意名ヲ命ジ、異名十餘

ニ及ブ武田信玄ノ植ヘタル、人面竹ヲ武田竹ト
 稱スルノ類ノ如キ歟、

きつこうちく

きつこうちく漢名龜紋竹、又龜文竹ト書ス、近來
 庭園ニ植ヘテ愛玩スル俗ニ龜^カ甲^ナ竹ト稱スル竹
 ハ人面竹ト外貌相似テ竹種全ク異ナリ、人面竹
 ハ根上二三尺乃至四五尺ノ間節促リ、夫レヨリ
 毎節上努肉アルノミニシテ節促ラズ、梢ニ近キ
 ニ及デハ苦竹ノ如シ、龜紋竹ハ幹長大ニシテ高
 サ丈餘、周圍一尺四五寸ニシテ、毎節連鎖状ヲナ



龜紋竹

四十五竹譜
 龜紋竹
 竹名曰龜紋竹
 其節如龜背
 其葉如劍
 其花如星
 其實如珠
 其味甘美
 其性溫和
 其用甚廣
 其功甚大
 其色甚佳
 其味甚香
 其質甚堅
 其理甚明
 其法甚精
 其意甚深
 其理甚奧
 其法甚妙
 其意甚玄
 其理甚微
 其法甚簡
 其意甚易
 其理甚顯
 其法甚明
 其意甚顯
 其理甚顯
 其法甚顯
 其意甚顯

シ、根上三四尺、每節參互相ヒ接シ、亀甲形ヲナス、
枝葉幹軀ノ狀、江南竹ノ變種ナリ、秘傳花鏡云、亀
文竹産於寶陀岩、其年僅一本、以テ之、製扇甚奇、今不
可得矣、

近年石川縣下東山字熊コロビド云フ山ニ亀紋
竹生ズ、浮屠氏此竹ヲ蓮竹ト號シ、愚翁痴婆ニ對
シ、佛家ノ奇瑞ヲ説ク者アリ、今武州河崎大師ノ
寺内ニ移セシト云フ、亀紋竹ハ、近來花戸稀ニ植
ユル者アリ、年ヲ經テ生殖セバ、奇觀竹ノ尤ナル
者タルベシ、

